

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第18集

# 有 東 遺 跡

—第22次発掘調査報告書—

平成22年度静岡地区新構想高等学校（仮称）建設事業  
平成24年度新構想高等学校（仮称）屋外便所建築工事  
に伴う埋蔵文化財発掘調査

2 0 1 2

静岡県埋蔵文化財センター



静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第18集

# 有 東 遺 跡

—第22次発掘調査報告書—

平成22年度静岡地区新構想高等学校（仮称）建設事業  
平成24年度新構想高等学校（仮称）屋外便所建築工事  
に伴う埋蔵文化財発掘調査

2 0 1 2

静岡県埋蔵文化財センター



# 序

有東遺跡は静岡平野南部に所在する遺跡で、南北約1 km、東西約700mに及ぶ範囲に広がることから、弥生時代の大規模な集落遺跡と考えられています。有東遺跡周辺には全国的にも著名な登呂遺跡や鷹ノ道遺跡、汐入遺跡、豊田遺跡、小黒遺跡といった弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺跡群が集中する地域でもあります。この地域が平野部の中にあって、居住に適した微高地であったことが、長期にわたって集落が営まれた要因のひとつと考えられます。

有東遺跡では昭和22年に行われた第1次調査に始まり、現在までに22次にわたる調査が行われています。こうした調査により、弥生時代中期～後期にかけての集落域、墓域、水田域など、人々の生活に関わる遺構、遺物が数多く発見されています。これらは有東遺跡が当該期の拠点集落であった明白な証拠といえるでしょう。

今回報告する発掘調査は第22次発掘調査にあたり、静岡市立商業高等学校施設建設に伴って昭和55～57年にかけて行われた第3次・5次調査、平成元年に行われた6次調査の隣接地で実施されています。今回の調査では、上記調査で検出された遺構と同時期に造られたとみられる方形周溝墓が発見されるなど、有東遺跡における弥生時代集落構造の解明に向けた貴重な成果が得られました。

本書で報告するこれらの成果が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県教育委員会財務課、静岡市立商業高等学校ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2012年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝 田 順 也

# 例 言

- 1 本書は静岡県静岡市駿河区有東に所在する有東遺跡（第22次）の発掘調査報告書である。
- 2 平成22年度の現地調査は平成22年度静岡地区新構想高等学校（仮称）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県教育委員会財務課の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。平成23年度の現地調査及び資料整理は平成24年度新構想高等学校（仮称）屋外便所建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 有東遺跡の現地調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

現地調査	平成22年7～12月	調査対象面積	941㎡（A区）
	平成23年11～12月	調査対象面積	31㎡（B区）
資料整理	平成23年10月～平成24年3月		
- 4 調査体制は以下のとおりである。

平成22年度（現地調査）〈財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所〉

所長兼常務理事	石田 彰	次長兼総務課長	松村 享	専門監兼事業係長	稲葉保幸
総務係長	瀧みやこ	事業係	青井拓司		
調査課長	中鉢賢治	調査第三係長	溝口彰啓	常勤嘱託員	長友 信（調査担当）

平成23年度（現地調査・資料整理）〈静岡県埋蔵文化財センター〉

所長	勝田順也	次長兼総務課長	八木利真	主幹兼事業係長	村松弘文
総務係長	瀧みやこ	事業係	青井拓司		
調査課長	中鉢賢治	調査第二係長	溝口彰啓（調査担当）		
- 5 本書の執筆は第4章第3・5節、第5章の木製品の記述を中川律子が行い、それ以外は溝口彰啓が行った。
- 6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 平成23年度現地調査における掘削業務は小林土木緑化株式会社に委託した。基準点測量及び遺構測量業務については、平成22年度は株式会社フジヤマ、平成23年度は株式会社シン技術コンサルにそれぞれ委託した。資料整理における整理作業業務は株式会社パソナに委託した。
- 8 発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。  
岡村渉 小泉祐紀 篠原和大 松井一明 山本宏治（五十音順・敬称略）
- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

# 凡 例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて世界測地系を基準とした。
- 2 遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図版に明記した。
- 3 遺物番号は、挿図掲載遺物について種類・挿図の別にかかわらず、通し番号を付した。
- 4 第2図周辺遺跡分布図は国土地理院発行1：25,000地形図「静岡西部」及び「静岡東部」、第3図調査区位置図は静岡市発行1：2,500都市計画図を複写し加工・加筆した。

# 目次

第1章 調査に至る経緯 .....	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 調査の方法と経過	
第1節 調査の方法 .....	4
第2節 調査の経過 .....	5
第3節 基本層序 .....	5
第4章 調査の成果	
第1節 調査の概要 .....	7
第2節 A区の検出遺構 .....	7
第3節 A区の出土遺物 .....	22
第4節 B区の検出遺構 .....	28
第5節 B区の出土遺物 .....	29
第5章 まとめ .....	36

写真図版

抄録

# 挿図目次

第1図 遺跡位置図 .....	1	第13図 土坑実測図1 .....	17
第2図 周辺遺跡分布図 .....	3	第14図 土坑実測図2 .....	18
第3図 調査区位置図 .....	4	第15図 S X01~04実測図 .....	21
第4図 A区グリッド配置図 .....	5	第16図 A区出土土器実測図 .....	23
第5図 基本土層図 .....	6	第17図 A区出土土器・石製品実測図 .....	24
第6図 A区上層全体図 .....	8	第18図 A区出土石製品・木製品実測図 .....	25
第7図 1号畦畔・2号畦畔実測図 .....	9	第19図 A区出土木製品実測図 .....	27
第8図 4号畦畔・5号畦畔実測図 .....	10	第20図 B区上層全体図 .....	28
第9図 A区下層全体図 .....	12	第21図 B区下層全体図 .....	29
第10図 S Z01・S Z02実測図 .....	13	第22図 B区出土土器実測図 .....	31
第11図 S Z03・S Z05実測図 .....	14	第23図 B区出土土器・石製品実測図 .....	32
第12図 S Z04実測図 .....	15	第24図 B区出土木製品実測図 .....	33

# 挿表目次

第1表 出土土器一覧表 ..... 34  
第2表 出土石製品一覧表 ..... 35

第3表 出土木製品一覧表 ..... 35

# 写真図版目次

図版1	1. A区上層全景（北西から） 2. A区上層全景（東から）	図版10	1. S K 19遺物出土状況（西から） 2. S K 23遺物出土状況（北から） 3. S X 02・S Z 05完掘状況（西から） 4. S X 03・04完掘状況（西から） 5. S D 01完掘状況（北西から） 6. S D 03完掘状況（南東から）
図版2	1. 1号畦畔検出状況（北から） 2. 2号畦畔芯材出土状況（東から）	図版11	1. B区上層完掘状況（北から） 2. B区S D 01木製品出土状況 （北西から） （南東から） 3. S D 01完掘状況（南から） 4. B区西壁土層（東から） 5. B区下層全景（南東から）
図版3	1. 1号・2号畦畔検出状況（北から） 2. 4号畦畔検出状況（北から）	図版12	1. A区遺構出土土器 2. A区遺構出土土器
図版4	1. 5号畦畔検出状況（北東から） 2. 5号畦畔内遺物出土状況 （北西から）	図版13	1. A区遺構外出土土器 2. A区出土石製品 3. A区出土木製品
図版5	1. A区下層全景（西から） 2. A区下層全景（南西から）	図版14	1. A区出土木製品
図版6	1. S Z 01完掘状況（東から） 2. S Z 01E遺物出土状況（東から）	図版15	1. B区S D 01出土土器 2. B区S X 01・02出土土器 3. B区出土石製品
図版7	1. S Z 02完掘状況（北西から） 2. S Z 03完掘状況（北西から）	図版16	1. B区S D 01出土木製品
図版8	1. S Z 04完掘状況（南東から） 2. S Z 03・04遠景（南西から）		
図版9	1. S Z 05完掘状況（北西から） 2. S K 02完掘状況（北西から） 3. S K 03完掘状況（北西から） 4. S K 06完掘状況（西から） 5. S K 10完掘状況（北西から）		

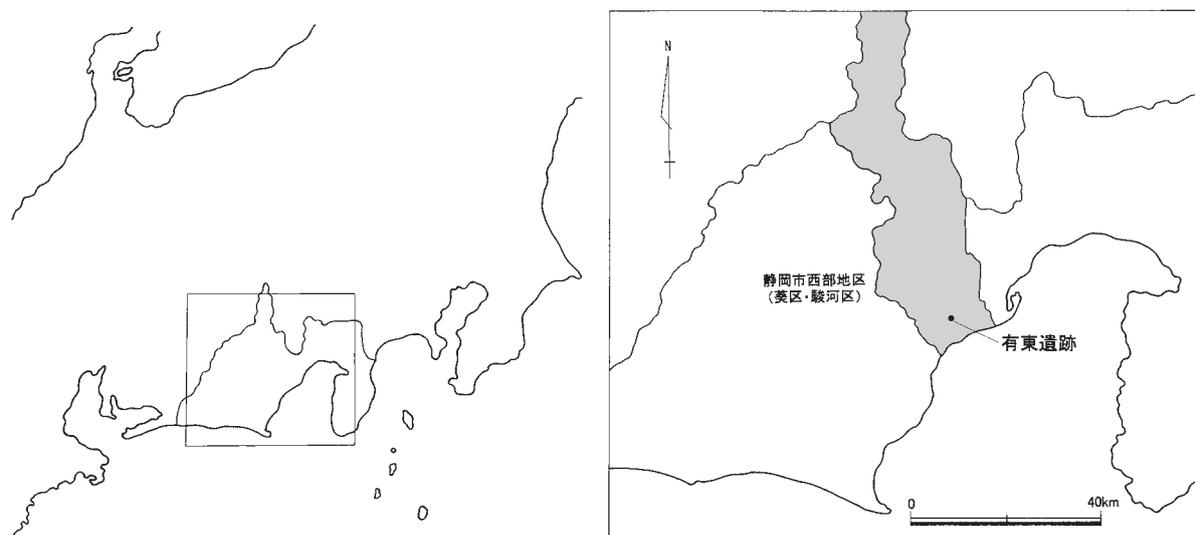
# 第1章 調査に至る経緯

静岡県・静岡県教育委員会と静岡市・静岡市教育委員会は少子高齢化等の社会情勢の変動、また生徒の多様なニーズの現状を踏まえ、静岡市内に所在する公立高等学校のあり方について共同で検討委員会を設置して対応を検討した。平成20年1月には「静岡市内の公立学校の共同再編計画」を策定し、学校施設・設備等に関する基本方向を示すに至った。この方針に従い、静岡地区では静岡県を設置者として、静岡県立静岡南高等学校及び静岡市立商業高等学校を再編整備して新構想高等学校を設置することとなり、静岡市立商業高等学校校地において整備が行われることとなった。整備にあたっては既存校舎の改修、また教室棟などの新校舎建設が計画された。

新校舎建設工事にあたっては、対象地の静岡市立商業高等学校校地が周知の包蔵地である有東遺跡の範囲内であり、また既存の校舎等施設建設に伴うこれまでの発掘調査により、遺構の存在が確認されたため、対象地における遺跡の状況把握が急務となった。そこで、県教育委員会財務課と協議の上、文化財保護課が新校舎建設予定地である正門前駐車場付近において、平成21年12月19日に2箇所の試掘坑により確認調査を実施し、方形周溝墓の一部とみられる溝状遺構の存在を確認した。また、グラウンド南部周辺で計画された屋外便所等の施設建設予定地においても、平成22年8月4～5日に4カ所の試掘坑を設定して試掘調査が行われ、遺構・遺物の存在が確認された。

この結果を受けて、県教育委員会財務課、文化財保護課及び財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の三者が協議をもち、平成22年7月より新校舎建設工事対象地（A区）において発掘調査の実施について合意した。また、グラウンド南西の屋外便所建設対象地（B区）においても財務課、文化財保護課、埋蔵文化財センターが改めて協議を行い、平成23年11月より発掘調査の実施について合意した。併せて、発掘調査に関わる成果については平成22年度分、平成23年度分を同時に整理し、報告することも取り決めた。

なお、今回報告する平成22～23年度の発掘調査は静岡県教育委員会、静岡市教育委員会が実施した発掘調査を通算した場合、第22次調査となる。



第1図 遺跡位置図

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

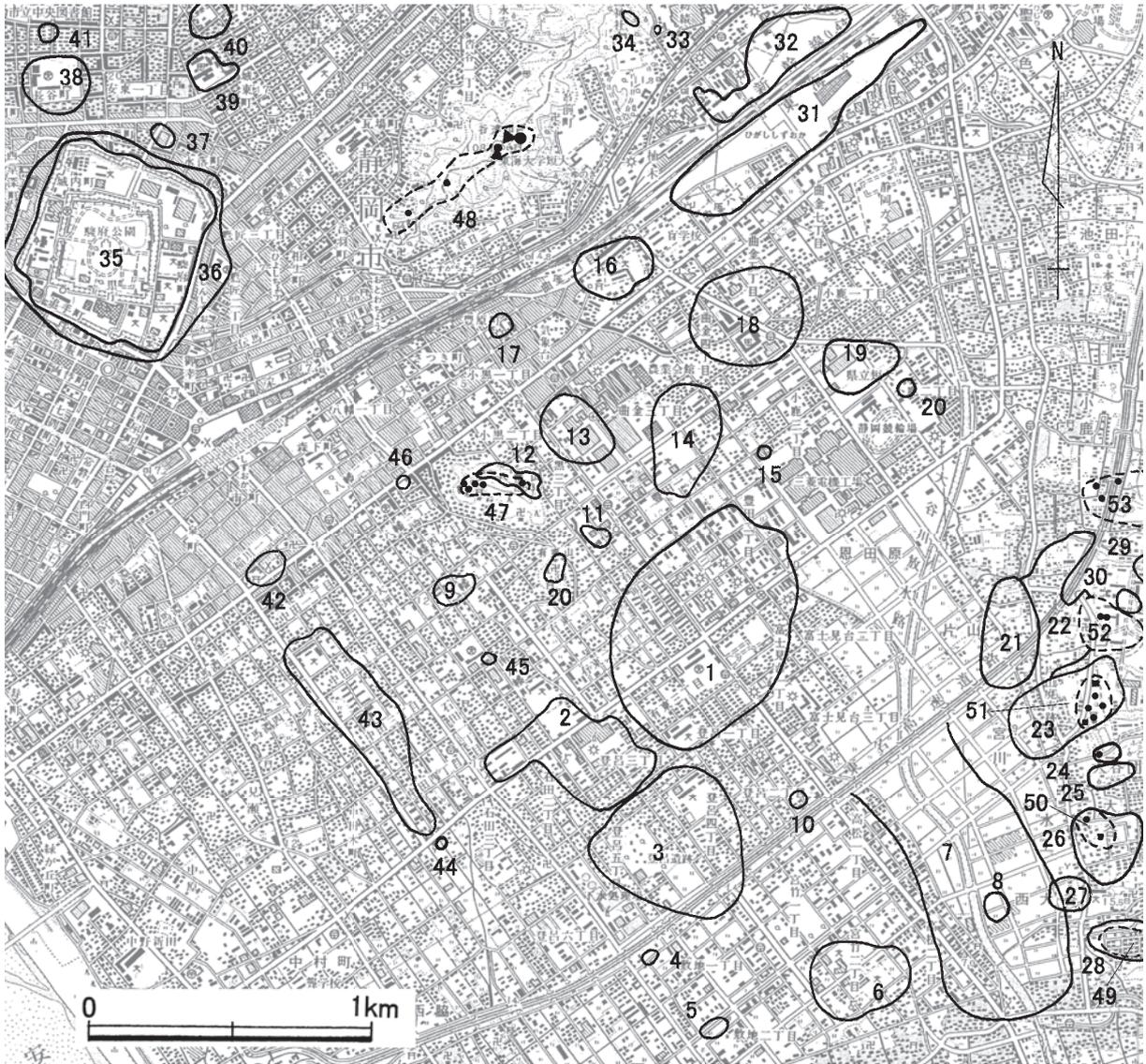
静岡平野の西側を流れる安倍川は山梨県との県境、南アルプス山系を源流として駿河湾へと注ぐ全長53.3kmの河川である。全長の割に高低差のある急流で、天竜川や富士川などともに「東海型河川」とも称される。安倍川が運んだ大量の土砂によって形成された安倍川扇状地は、賤機山を扇の頂点として南東方向に向かって半径約3.5kmの扇状に広がる。扇状地の東側には谷津山や八幡山、有度丘陵といった丘陵が所在することにより堆積が阻害され、その周辺は多くの湿地帯が展開するなど、複雑な地形となっている。扇状地内は中近世の治水工事によって安倍川の流路が固定される以前、多くの小河川が分流していたとみられる。これにより自然堤防や後背湿地が微地形として形成され、弥生時代以来に営まれた集落の多くはこうした自然堤防状の微高地上に立地することが知られる。有東遺跡は八幡山西縁から南東方向に延びる久能街道微高地上に展開し、周辺にも登呂遺跡や鷹ノ道遺跡といった弥生時代を中心とした時期の大集落が所在することから、居住域として比較的安定した土地であったことが窺える。

### 第2節 歴史的環境

静岡平野周辺では弥生時代中期中葉以降になると平野部での遺跡分布がみられるようになる(第2図)。静岡平野南部に位置する有東遺跡(1)は、中期中葉以降に集落域として展開した遺跡で、1947年の1次調査以降、継続的な調査が行われている(静岡研2011・静岡市2011)。集落域に隣接する形で方形周溝墓が築造され、それに伴う中期から後期にかけての土器・石器・木製品など豊富な遺物が出土している。中期後半にはさらに広範囲にわたって遺跡が分布するようになり、集落域の拡大がみられる。有東遺跡周辺では鷹ノ道遺跡(2)や豊田遺跡(14)、また静岡平野中央部の駿府城内遺跡(36)や瀬名遺跡、川合遺跡などでも集落域に伴う大規模な方形周溝墓が検出されている。有東遺跡や川合遺跡、駿府城内遺跡では石器の出土が顕著であり、製品だけでなく、未製品やその製作具と考えられる石器なども多く発見されている。石器を集中的に生産する様相があり、集落内における工人的役割の存在を窺わせる。

弥生時代後期になると平野部における遺跡の数はさらに増加し、水田耕作を背景とした人々の平野部への進出が加速するとともに、中期段階までの集落は規模の縮小や所在地の移動など、やや変化がみられることが指摘される(静岡市2011)。有東遺跡ではこの段階になると散在する小規模な集落形態となるようである。有東遺跡の南側にあたる登呂遺跡(3)は、富士見微高地の先端からその南東の低地に広がって所在する当該期の代表的な集落遺跡である。住居跡・高床式倉庫跡・水田などの遺構、また大量の土器・木製品が発見され、日本における原始農耕社会の様相を初めて明らかにした遺跡として学史上著名な遺跡でもある。水田が広範囲で確認されるのもこの時期の特徴で、登呂遺跡・鷹ノ道遺跡の他、曲金北遺跡(31)・長沼遺跡(32)などでも水田遺構が検出されている。

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての集落としては、有東遺跡北西の小黒遺跡(13)、南東の汐入遺跡(6)がある。いずれも堀や溝で区画された掘立柱建物や居住域が検出されることから、高い階層の居住者が想定されている。



番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	有東遺跡	弥生～中世	集落跡	28	上ノ山遺跡	縄文～古墳	集落跡・古墳
2	鷹ノ道遺跡	弥生～古墳	集落跡・水田	29	大段Ⅰ遺跡	旧石器	散布地
3	登呂遺跡	弥生～古墳	集落跡・水田	30	大段Ⅱ遺跡	縄文	散布地
4	水洗遺跡	古墳	集落跡	31	曲金北遺跡	弥生～古代	水田・道路
5	下島遺跡	弥生～古墳	散布地	32	長沼遺跡	弥生～中世	水田・集落跡
6	汐入遺跡	弥生～中世	集落跡	33	仕舞海道坪遺跡	弥生	散布地
7	元宮川神明原遺跡	縄文～中世	集落跡・祭祀跡	34	柚木瓦窯跡群	古代	窯
8	大谷構井之坪居館跡	中世	居館跡	35	駿府城跡	近世	城館跡
9	八幡五丁目遺跡	古墳	水田	36	駿府城内遺跡	弥生～古代	集落跡
10	有東岩跡	中世	城館跡	37	東草深遺跡	弥生～近世	集落跡
11	有明遺跡	弥生	集落跡・包含地	38	静岡高橋内遺跡	弥生	集落跡
12	八幡山城跡	中世	城館跡	39	城東町遺跡	古墳	集落跡
13	小黒遺跡	弥生～古墳	集落跡(水田)	40	西千代田遺跡	弥生	散布地
14	豊田遺跡	弥生～古墳	集落跡・水田	41	大岩遺跡	弥生	集落跡
15	三菱工場内遺跡	古墳・古代	散布地	42	稻川遺跡	古代	散布地
16	曲金B遺跡	古墳・古代	集落跡・官衙	43	ケイセイ遺跡	古墳～近世	集落跡・官衙
17	前ヶ崎遺跡	古墳	集落跡	44	南消防署内遺跡	弥生～古墳	集落跡・水田
18	曲金A遺跡	弥生～古墳	集落跡	45	女子商校遺跡	弥生	集落跡・水田
19	小鹿杉本堀合坪遺跡	古代～中世	集落跡・水田	46	八幡三丁目遺跡	古墳	水田
20	小鹿蟹田堀合坪遺跡	古代～近世	水田跡	47	八幡山古墳群	古墳	古墳
21	片山遺跡	弥生～古墳	散布地・集落跡	48	谷津山古墳群	古墳	古墳
22	片山麩寺跡	中世	社寺跡	49	上ノ山古墳群	古墳	古墳
23	宮川遺跡	旧石器～古代	散布地・集落跡	50	片山横穴群	古墳	横穴墓
24	清泉寺窪瓦窯跡	古代	窯	51	宮川古墳群	古墳	古墳
25	清泉寺窪遺跡	縄文	散布地	52	静岡大学構内古墳群	古墳	古墳
26	井庄段遺跡	縄文～弥生	散布地・集落跡	53	小鹿古墳群	古墳	古墳
27	経田遺跡	縄文・古墳	集落跡・生産遺跡				

第2図 周辺遺跡分布図

## 第3章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

#### 1 現地調査

発掘調査は平成22年度調査区をA区（対象面積941㎡）、平成23年度調査区をB区（対象面積31㎡）として実施した。いずれの調査区でも確認調査の結果から、表土以下に学校施設等建設の際の盛土が確認されたため、作業効率を考慮して重機による表土除去を行った。その後は遺物包含層掘削、遺構検出及び掘削作業を人力掘削にて実施した。発掘調査にあたって、A区については測量及び遺物取上げを円滑に行うため、調査区内に10m方眼の国土座標（世界測地系）に従ったグリッドを設定した（第4図）。B区については調査区が狭小であるため、グリッド設定は行っていない。出土した遺物は現地調査と並行して水洗・注記といった基礎整理作業を行い、併せて遺物台帳を作成した。

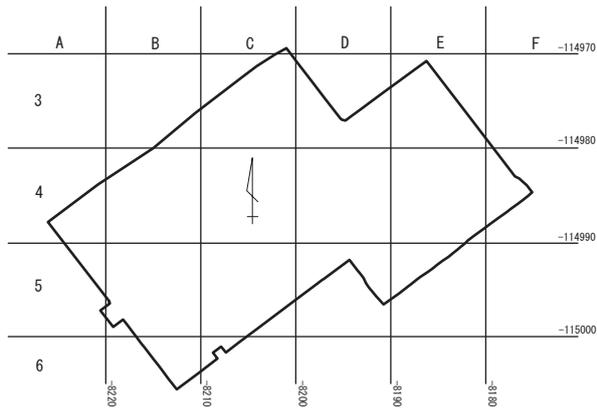
遺構測量作業については、測量及び図面作成の一部は調査の迅速化を図るため、平成22年度は株式会社フジヤマ、平成23年度は株式会社シン技術コンサルに委託して実施した。遺構実測図については空中写真測量及びトータルステーションを使用して、1/20を基本として行い、必要に応じてより詳細な遺構実測図を1/10の縮尺で作成した。現地における写真撮影は6×7版モノクロ及びリバーサルフィルムを基本として使用し、35mmリバーサルフィルムを補助的に使用した。

#### 2 資料整理

平成22年度・平成23年度調査成果を合わせて、埋蔵文化財センター及び中原事務所にて資料整理作業を行った。資料整理作業は株式会社パソナに委託して実施した。出土遺物は分類・仕分け作業を経て、出土地点や遺物の種別などを参考としながら接合作業を行った。出土遺物は出土地点や遺物の特徴をもとに抽出した上で実測作業を行い、報告書掲載のための版組・トレースを実施した。それと併行し、6×7版モノクロ及びリバーサルフィルムを使用した写真撮影を埋蔵文化財センター写真室にて行い、撮



第3図 調査区位置図



第4図 A区グリッド配置図

影した写真は版組のうえ報告書に掲載した。遺構図については現地で作成した遺構図、遺物出土状況図を編集して版組・トレースを行い、遺構写真については報告書の体裁に即した版組を行った。遺物及び図面・写真といった記録類は上記作業終了後、台帳を作成した上で収納した。出土した木製品等の脆弱遺物については恒久的に遺物を保存していくために、埋蔵文化財センターにおいて保存処理を行っている。

## 第2節 調査の経過

### 1 平成22年度（A区現地調査）

調査にあたり、A区におけるアスファルト舗装などの上部構造物の解体・撤去を7月26日から行った。上部構造物の撤去後、8月16日まで重機による表土除去作業を実施し、掘削した排土は10tダンプトラックに積載し、静岡市清水区の排土置場に運搬した。8月16日からは作業員による第1遺構面の包含層掘削及び遺構掘削作業を開始し、排土はベルトコンベアで搬出し4tダンプトラックで排土置場へ運搬した。10月5日には上層遺構面の調査を終了、ラジコンヘリによる空中写真撮影及び空中測量を行った。10月6日からは下層遺構面の包含層の掘削を開始し、遺構検出の後、25日から遺構掘削を行った。11月10日には遺構掘削を終了させ、上層遺構同様、ラジコンヘリによる空中写真撮影及び空中測量を行った。写真撮影終了後、盛土の解体等を行い、11月13日には全ての調査を終了した。調査終了後は、現地の撤収作業を行い、調査区を埋め戻すとともに、アスファルト舗装や側溝等の現状復旧工事を12月2日まで行った。

### 2 平成23年度（B区現地調査・資料整理）

**現地調査** 調査準備としてB区周辺のフェンス・鉄棒等を11月17日から撤去作業を行うとともに、安全フェンスの設置を行った。21日からは重機による表土掘削を開始し、22日～28日にかけて上層遺構の包含層掘削、遺構掘削作業を行った。遺構完掘後は写真撮影、測量による記録を作成した。29日からは下層遺構の包含層掘削作業に取りかかり、12月5日には遺構を完掘し、6日に写真撮影、測量による完掘状況の記録を行い、現地調査を終了した。7日からは調査区の埋め戻し、9日までにフェンス等の撤去、片付けを行った。

**資料整理** 資料整理は現地作業と一部並行して、10月より埋蔵文化財センター及び中原事務所で実施した。10～11月にかけて出土土器の分類・接合及び復原作業を行い、実測を行った。記録類については写真・図面の整理の後、遺構図の編集・版下作成を実施した。12月からは出土遺物の版下作成・トレース・一覧表作成・写真撮影、遺構図のトレースを行うとともに、報告書本文の執筆、報告書編集作業を行い、校正作業を経て発掘調査報告書を刊行し、全ての業務を完了した。

## 第3節 基本層序

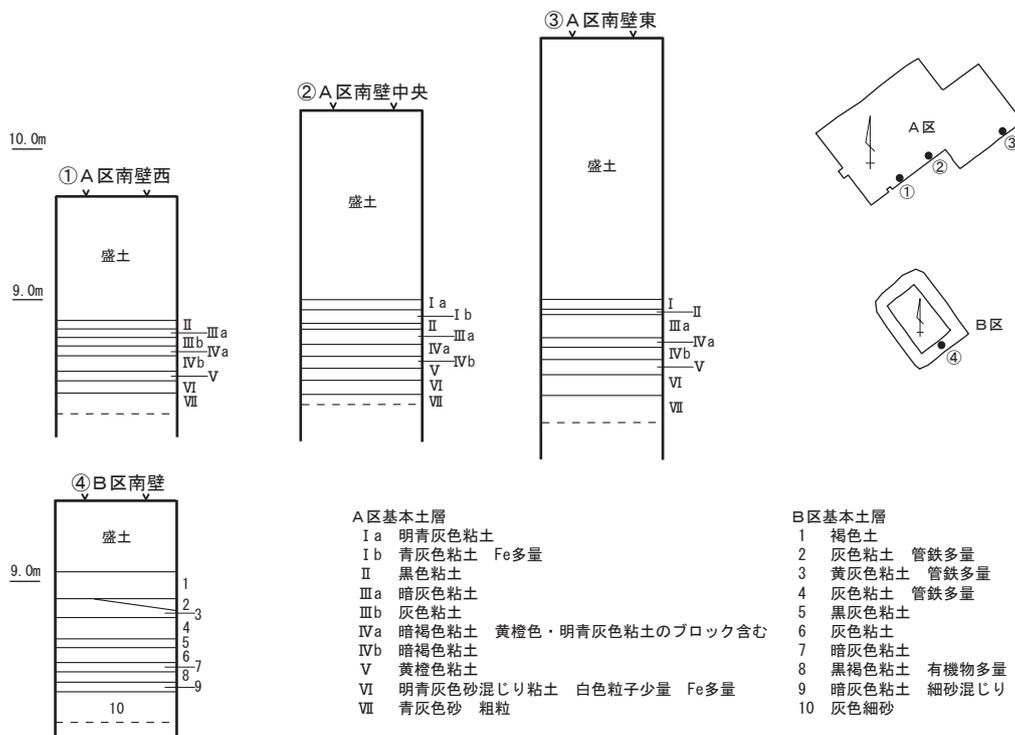
### 1 A区の層序（第5図）

今回の調査区である正門広場付近は、1989年まで旧校舎が建てられていた範囲であり、盛土層がかなりの深さに達しており、遺構面の一部は攪乱の及ばない部分に島状に残された状態であった。

I層は時期は不明確だが、古墳時代以降に耕作されていた水田耕作土と考えられる。I a・I bの2層に分けられ、I a層はI b層に比べ荒い粒子を含む。I層とII層の境界が上層遺構面で、古墳時代後期頃と思われる水田畦畔を確認した。II層の黒色粘土層は極めて薄い、静岡平野南部で広範にみられる古墳時代中期頃の腐食土層とみられ、隣接する第5次調査地点でも確認される（静岡市2011）。III a層の暗灰色粘土層は、II層との関係から古墳時代前期頃までの水田耕作土層とみられる。この層の上面でも畦畔が検出された。III b層の灰色粘土層は中央から西側付近で認められる。IV層暗褐色粘土層でIV a・IV bの上下2層に分層される。弥生時代中期～後期の遺物を含むいわゆる「登呂層」と考えられる。上部のIV a層は黄橙色粘土ブロックや、明青灰色粘土ブロック、赤褐色スコリアなどが多量に混じっている。また下部のIV b層は、そうしたブロックをほとんど含まない暗褐色粘土で、調査区西側よりも東側で厚く堆積する状況であった。V層は黄橙色粘土層で、これ以下は遺物を含まない自然堆積層である。V層上面が下層遺構の検出面となる。VI層は明青灰色砂混じり粘土層である。VII層は青灰色砂層で、層をなして堆積した植物遺存体を多く含む。

## 2 B区の層序（第5図）

B区はグラウンドの南西隅の一角にあり、A区とは明らかに層位が異なるため、別途層序を説明する。表土直下は学校の造成に伴うとみられる盛土がなされる。1層は褐色土、2層は灰色粘土層で、造成がなされる以前の水田耕作土と考えられる。3層の黄灰色粘土、4層の灰色粘土層には管鉄がかなり発達している状況が窺える。5層の黒灰色粘土層は鉄分及び有機物をわずかに含む。6層は灰色粘土、7層は暗灰色粘土で、いずれも境界はやや乱れている。1～7層土からはほとんど遺物は出土していない。8層の黒褐色粘土は弥生時代後期の包含層で、土器片を多く含む。植物遺存体や炭化物を多く含み、灰色粘土ブロックもわずかに含む。8層上面で上層遺構を確認している。9層の暗灰色粘土は部分的にかなり薄くなる箇所があり、安定した堆積をしていないようである。9層上面で下層遺構の検出を行っている。10層の灰色細砂は自然堆積層である。



第5図 基本土層図

## 第4章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

A区では上層、下層の2面にわたる遺構面が確認されている。上層遺構として検出された遺構は弥生時代後期～古墳時代後期にかけての水田耕作にともなう畦畔とみられ、1～5号畦畔の5条が確認された。Ⅱ層上面とⅢ層上面で検出されており、方向が異なるものがあるため、時期を違えた2面以上の水田遺構面も伴うものと考えられる。ただし、Ⅱ層が非常に薄く、場所によっては存在しない箇所もあった状況から、複数の水田面として把握することが困難であった。この地区で長期間にわたって水田耕作が営まれたことで土壌の攪拌が進んだことに起因すると思われる。

下層遺構面はⅤ層上面で検出した。弥生時代中期を中心とした時期の遺構群で、方形周溝墓、土坑、溝状遺構、性格不明遺構が検出されている。方形周溝墓は上部が後世の水田耕作による攪拌などを受けたせいか、溝がかろうじて残っているものが大半であったが、S Z05はⅤ層上に盛られた盛土が一部に残存していることが確認された。これら方形周溝墓は東側に隣接する第3・5・6次調査区で検出された方形周溝墓群と主軸方向や規模が近似するため、一連の遺構と推定される。

B区は狭小な調査区ではあるが、上層・下層の2面にわたる遺構面が確認された。上層遺構は8層上面で検出された弥生時代後期以降の落ち込み状の遺構であった。下層遺構は9層上面で確認された溝状遺構で、弥生時代後期の集落に関連する遺構とみられる。

### 第2節 A区の検出遺構

#### 1 上層遺構（第6図）

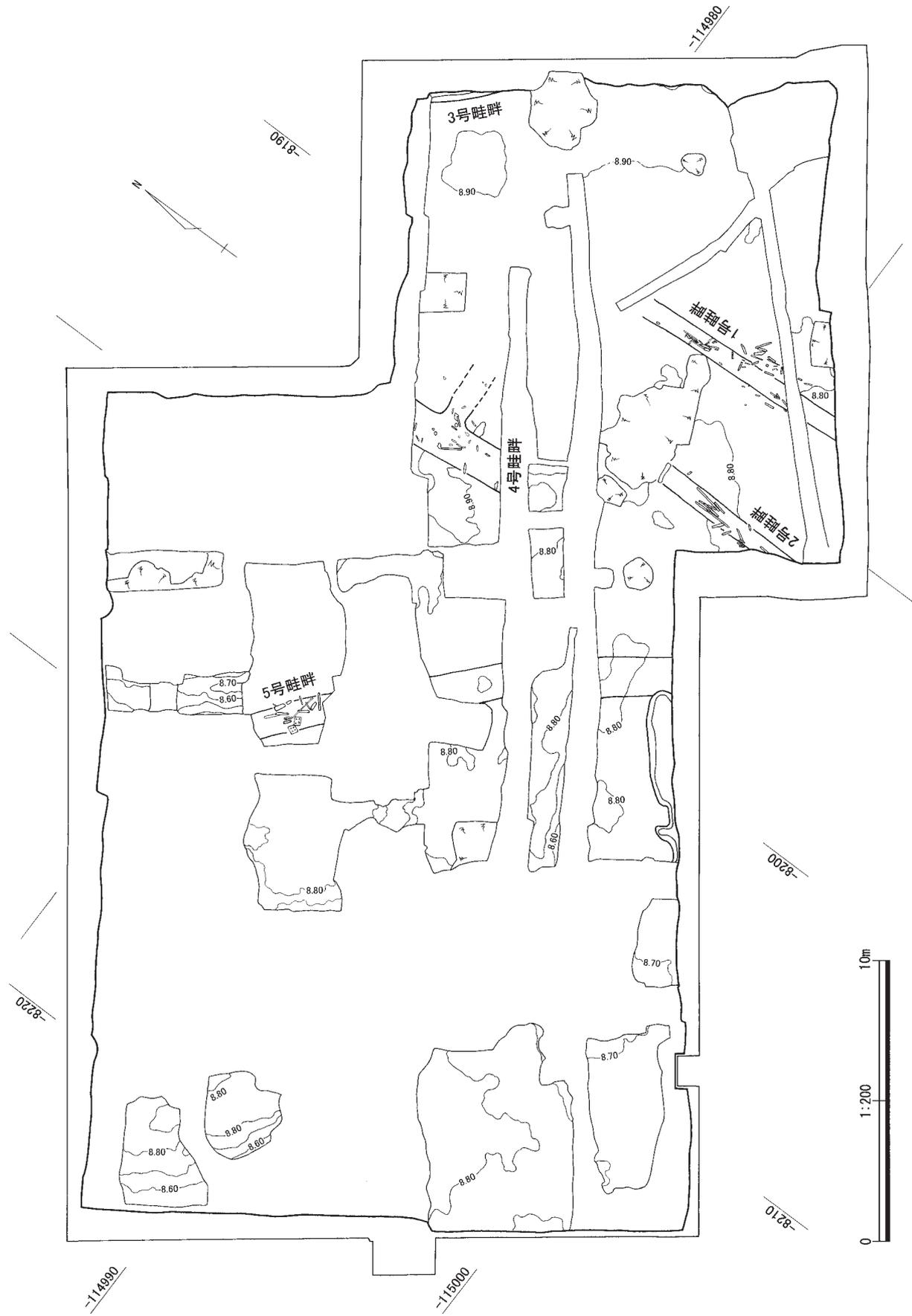
##### (1) 1号畦畔・2号畦畔・4号畦畔（第7・8図）

上層遺構として検出された畦畔は後述するように、層位や方向性から少なくとも2時期にわたるものと考えられる。新しい時期の畦畔が1・2・4号畦畔、古い時期の畦畔が3・5号畦畔と考えられる。

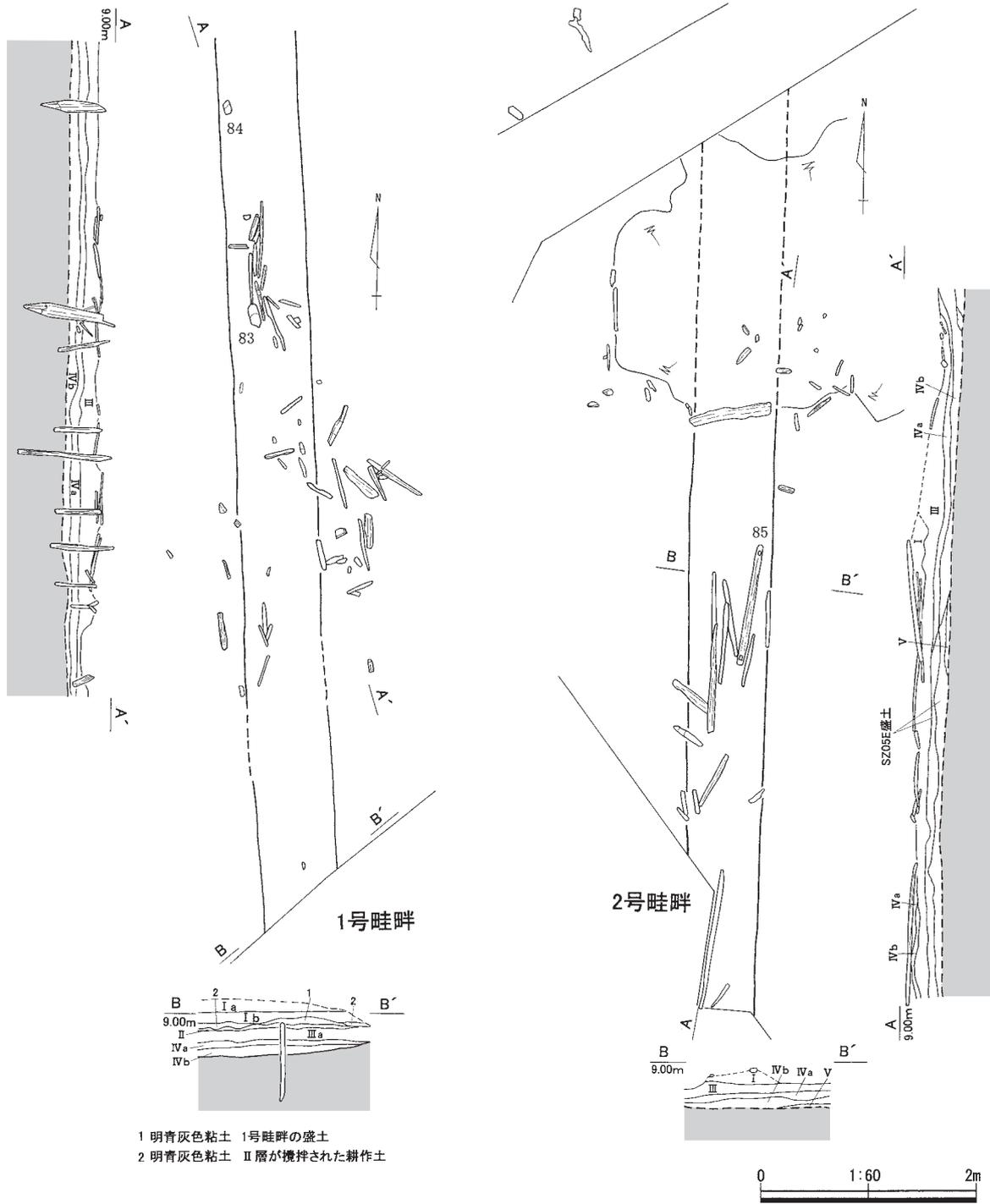
1号畦畔はE4・5区付近で南北方向に延長約8m分が検出された（第7図）。畦畔を形成する盛土はほとんど失われていたものの、調査区南端付近でわずかに構築土が確認された。Ⅰ層土とほぼ同様の明青灰色粘土を構築土としていたために、観察は極めて困難であった。畦畔は木材や縦に打ち込まれた杭列を芯材とし、南北はN-5°-Wの方向を示す。芯材は第19図83・84のように大型丸太材の先を尖らせた杭や、細い木材の杭があり、畦畔内部からは土師器破片が出土している。古墳時代中期の層位とされるⅡ層の直上面に盛土されていることから、古墳時代後期に営まれたものと考えられる。

2号畦畔はD5区付近で南北方向に延長約6m分が検出された（第7図）。1号畦畔の西側約2mの位置にはほぼ並行して築かれたもので、1号畦畔との間隔から小区面畦畔を形成していたと考えられるが、東西方向の畦畔は検出することはできなかった。畦畔構築土は全く失われているとみられ、芯材の木材等のみが遺存している状況であったため、第7図ではその範囲から規模を想定したものとなっている。芯材には建築材などが転用されており、両端に穿孔がみられる第19図85などが出土しているが、1号畦畔のような杭は打ち込まれていないようである。北側は検出面直上にまで攪乱が及んでいたために不明瞭であった。その他の遺物は第16図1の土師器坏が出土している。

4号畦畔はD3・4区内で検出された延長約3.5mの南北方向の畦畔である（第8図）。盛土が残されておらず、芯材となる木材列によって遺構として認識した。また芯材の分布状況から、東西方向に畦畔

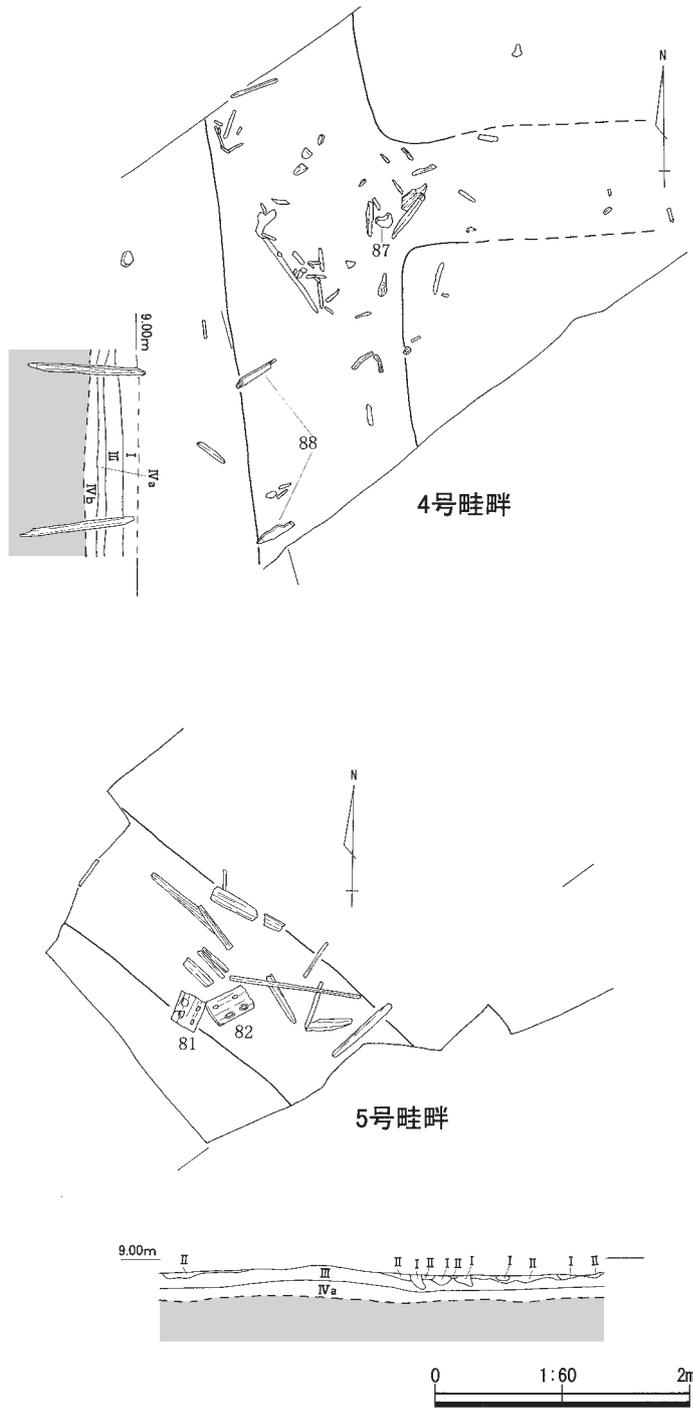


第6図 A区上層全体図



第7図 1号畦畔・2号畦畔実測図

が延びていた可能性がある。周辺にはII層の存在は確認されていないが、方向性から1号・2号と同時期の水田に伴う畦畔と考えられる。芯材は建築材や板材を転用した矢板や杭で、第19図88は建築材を2つに割って打ち込んでいる。土師器がごくわずかに含まれていた。



第8図 4号畦畔・5号畦畔実測図

(2) 3号畦畔・5号畦畔(第6・8図)

3号畦畔は調査区東端E3区付近の壁際で検出された南北方向に延長約2mの疑似畦畔の高まりである。Ⅲ層土で構築され、その両脇にⅠ層とⅡ層土が攪拌されて広がる状況が確認された。芯材を伴っておらず、小区画畦畔の残存とも考えられ、方向性から後述する5号畦畔と同時期の可能性がある。なお、3号畦畔南西約4mの部分で並行するとみられる杭の痕跡が観察されたが、同時期に営まれた畦畔の可能性はある。6号畦畔としたが、範囲や規模は不明である。用途不明木製品第19図89が周辺で出土している。

5号畦畔はC4・D5区にかけて検出されたN-45°-Wの方向を持つ南北の畦畔である(第8図)。Ⅲ層土の高まりとして検出された状況から、1・2・4号よりも古い段階の疑似畦畔と判断した。前述したように、その方向性とⅢ層土を畦畔の構築土とする状況から3号畦畔と同時期と考えられ、弥生時代後期～古墳時代前期の水田に伴うものと推定される。北側では芯材が畦畔構築土直下に埋め込まれていたが、南側では芯材は確認されず、Ⅲ層土の高まりのみが検出された。北側畦畔部分では、芯材とともに2枚一組の四ツ穴田下駄、第18図81・82が出土している。田下駄は他の芯材よりも僅かに高い位置で、しかも疑似畦畔の高まりの傾斜に沿うように出土したことから、畦畔芯材としてではなく、耕作に使用されていたものが何らかの理由で置き去りにされ、埋没した可能性も考えられる。土器類は第16図2の壺、3の甕が出土しているが、下層遺構に伴うものであろう。

## 2 下層遺構（第9図）

### (1) 方形周溝墓

#### S Z01（第10図）

調査区東南端のB5・6区で周溝の一部を検出した方形周溝墓である。大半は西側調査区外となっているため、規模は不明であるが推定される主軸方向はN-30°-Eである。周溝S Z01Nは北側一部を現代の攪乱により破壊されるが、長さ4.4m分が確認された。周溝の覆土は暗褐色土と黒色土を主体としている。周溝底から多数の木製品が出土しているが、第19図90・91に図示したような細長く薄い板状のものが多く、木製品は加工されているものもあるが、その用途や目的は出土状況からは窺うことはできない。周溝S Z01Eからも第19図92の同様の用途不明木製品が出土している。出土のほぼ底面で出土していることから、周溝が埋まらない段階で投棄されていると考えられる。周溝S Z01Eは調査区壁面から約1.5m程度が検出されており、S Z02の周溝S Z02Wと近接しているが、詳細な位置関係は攪乱の影響で判然としない。覆土の土層断面では両者の切り合い関係は出ていないため、少なくとも切合い関係はなく、同時期に併存していた可能性もある。土器は周溝S Z01Nから、第16図4の甕が出土しているのみである。

#### S Z02（第10図）

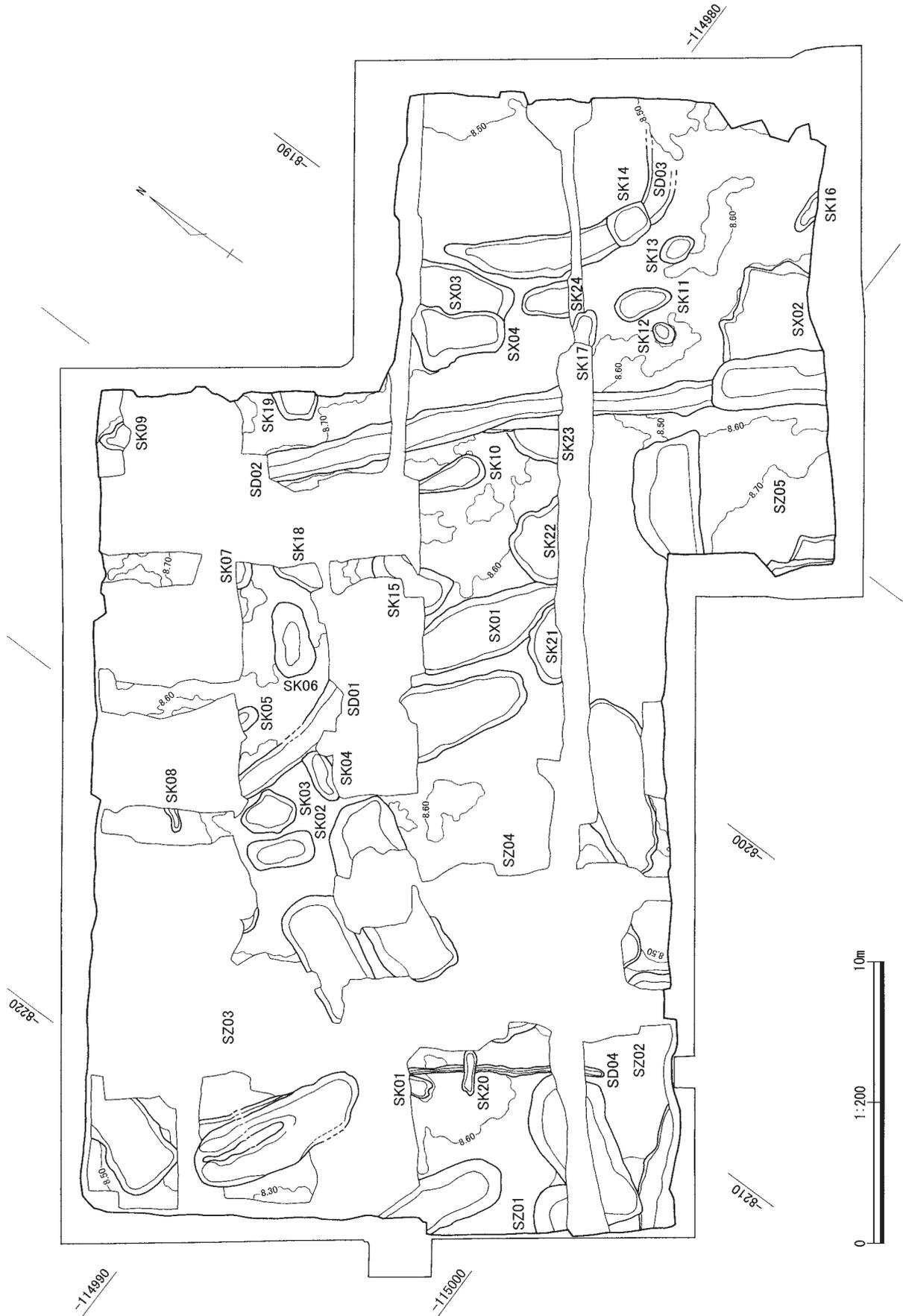
B5・6区、C6区で検出されており、上述のようにS Z01と近接した位置にある。遺構の大半は南側調査区となっているため、規模は不明であるが、推定される主軸方向はN-30°-Eである。盛土は残されていなかったが、周溝S Z02Wは長さ5.8m、最大幅2.6m、検出面からの深さは39cmを測り、周溝S Z02Nは西端の一部のみが検出されたのみで、規模は不明である。覆土は黒色・暗褐色粘土を主体とする。遺物は周溝S Z02Wから第16図5の壺、第17図71の磨石、周溝S Z02Nから第16図6・7の壺、第16図8の甕が出土しているが、いずれも覆土最上層からの出土であり、混入の可能性はある。

#### S Z03（第11図）

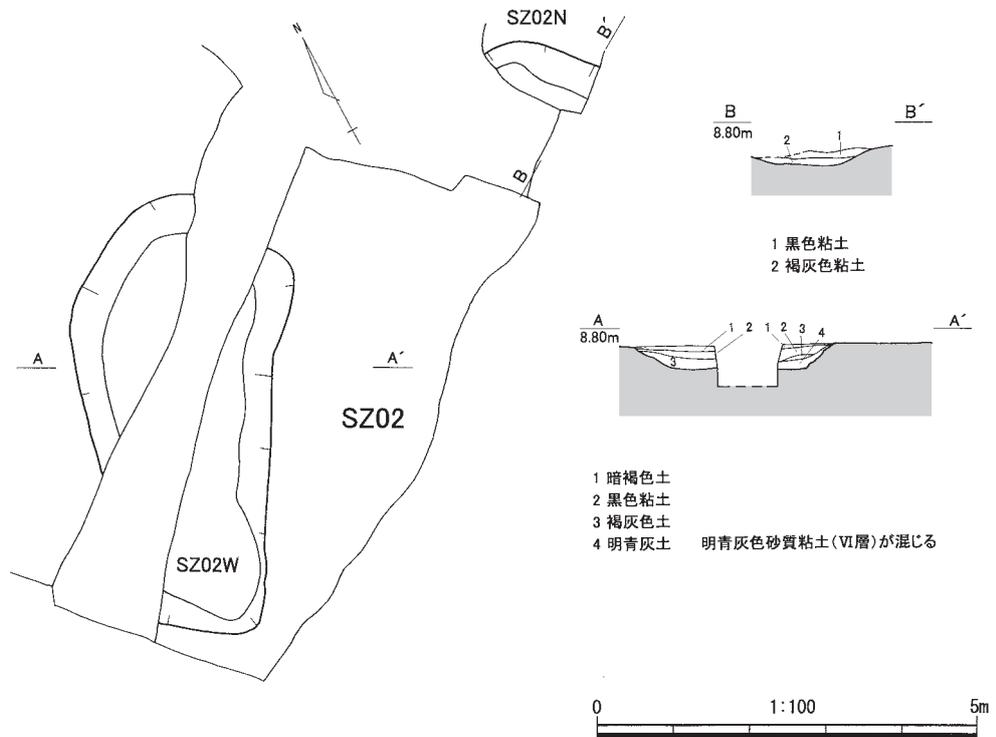
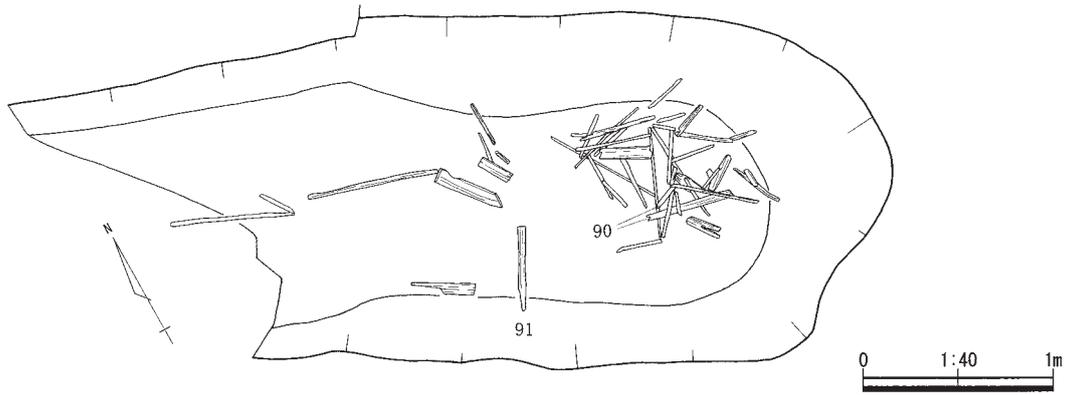
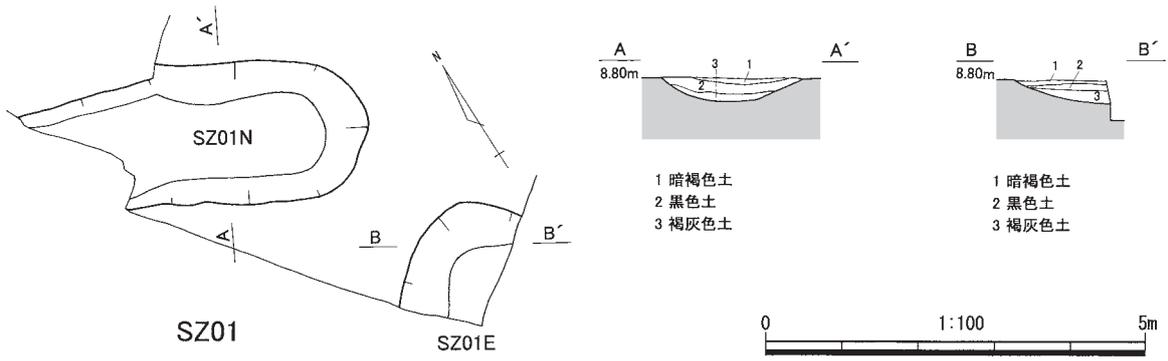
A4・5区、B4・5区で検出された方形周溝墓で、北側から方台部にかけて攪乱が及んでいたため、周溝S Z03Nは西端がわずかに検出されたのみであった。西側のS Z04とはほぼ隣り合って並ぶような形で近接している。南北規模は不明であるため、東西の周溝によって把握した遺構の規模は、東西11.5m、方台部の規模は東西7.7mであった。主軸方向はN-30°-Eで、S Z01・S Z02の推定値とほぼ同一である。周溝の四隅は切れており、全体が検出された周溝S Z03Sの規模は長さ6.5m、最大幅2.5m、検出面からの深さは37cmであった。上部が削平されているためか、他の周溝も検出面からの深さは30cm前後と極めて浅く、覆土は暗褐色土と黒色土を主体とした自然堆積層であった。墳丘の盛土は確認されず、主体部についても攪乱によって全く窺うことはできない。遺物は周溝S Z03Eから第16図9の壺、11・12の甕、第17図72の剥片、周溝S Z03Wから第16図10の甕、周溝S Z03Sから第18図73の敲石が出土している。

#### S Z04（第12図）

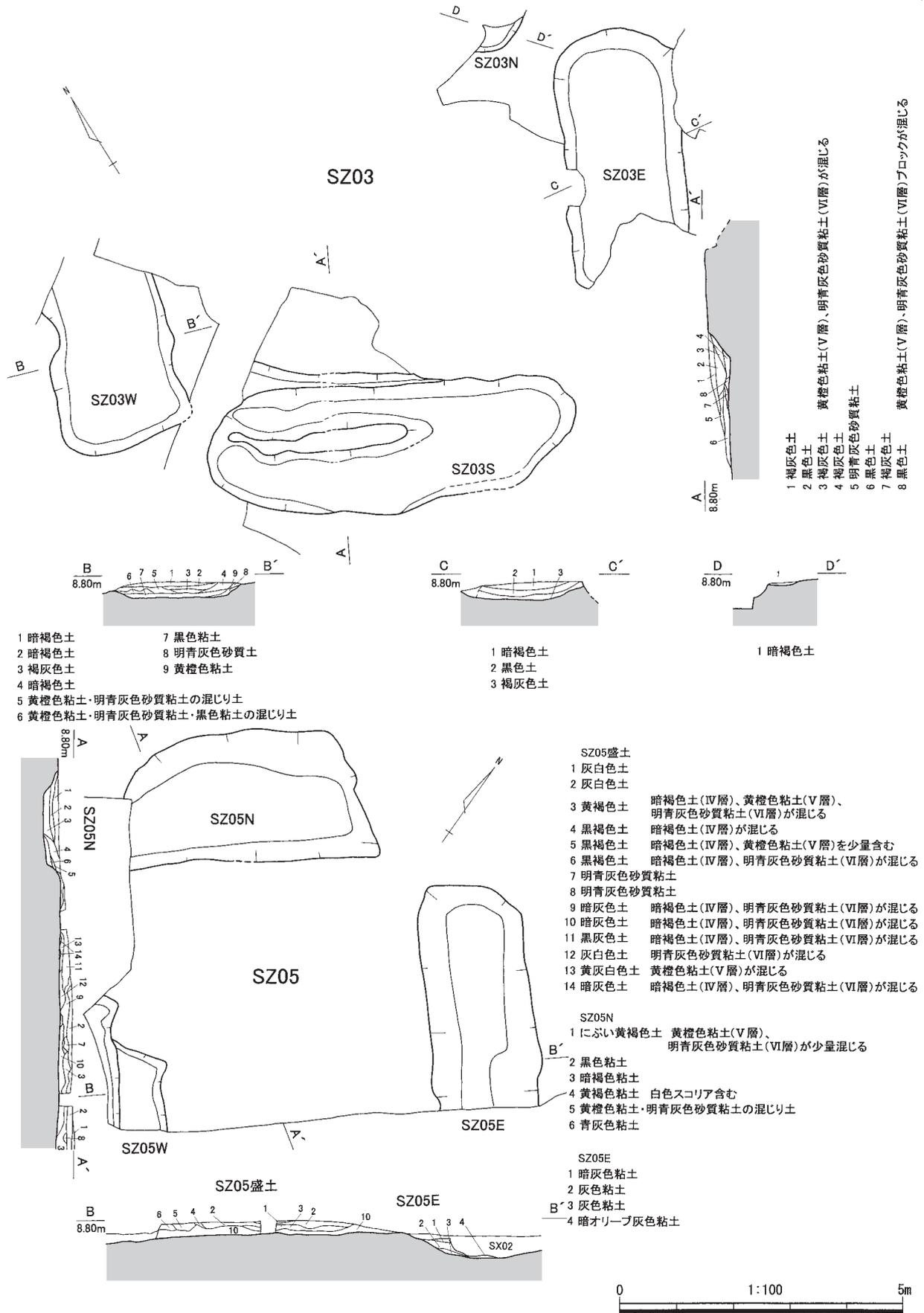
B4・5区、C4・5区、D5区にまたがって検出された方形周溝墓で、東側のS Z02と並行するように近接する。南側周溝の大半と方台部南半が攪乱によって失われているが、今回調査区の中では残りが最もよい遺構である。遺構の規模は東西11.1m、南北の推定11.8m、方台部の規模は東西6.9m、南北の推定7.5mである。主軸方向はN-35°-Eで、S Z01～03とはほぼ同方向といえる。周溝は四隅が切れており、長さ6.3～6.9m、最大幅2.0～2.2m、検出面からの深さは19～37cmであった。覆土は暗褐色土と黒色土を主体とし、下層には地山土のV・VI層のブロックを含んでいる。墳丘の盛土及び主体部は確認されなかった。遺物はS Z04Eで用途不明の木製品、第19図93・94などが出土しているが、出土状況から方形周溝墓との関連を見出すことは困難であった。S Z04Eでは南西端部分で木皮などを編んだ網



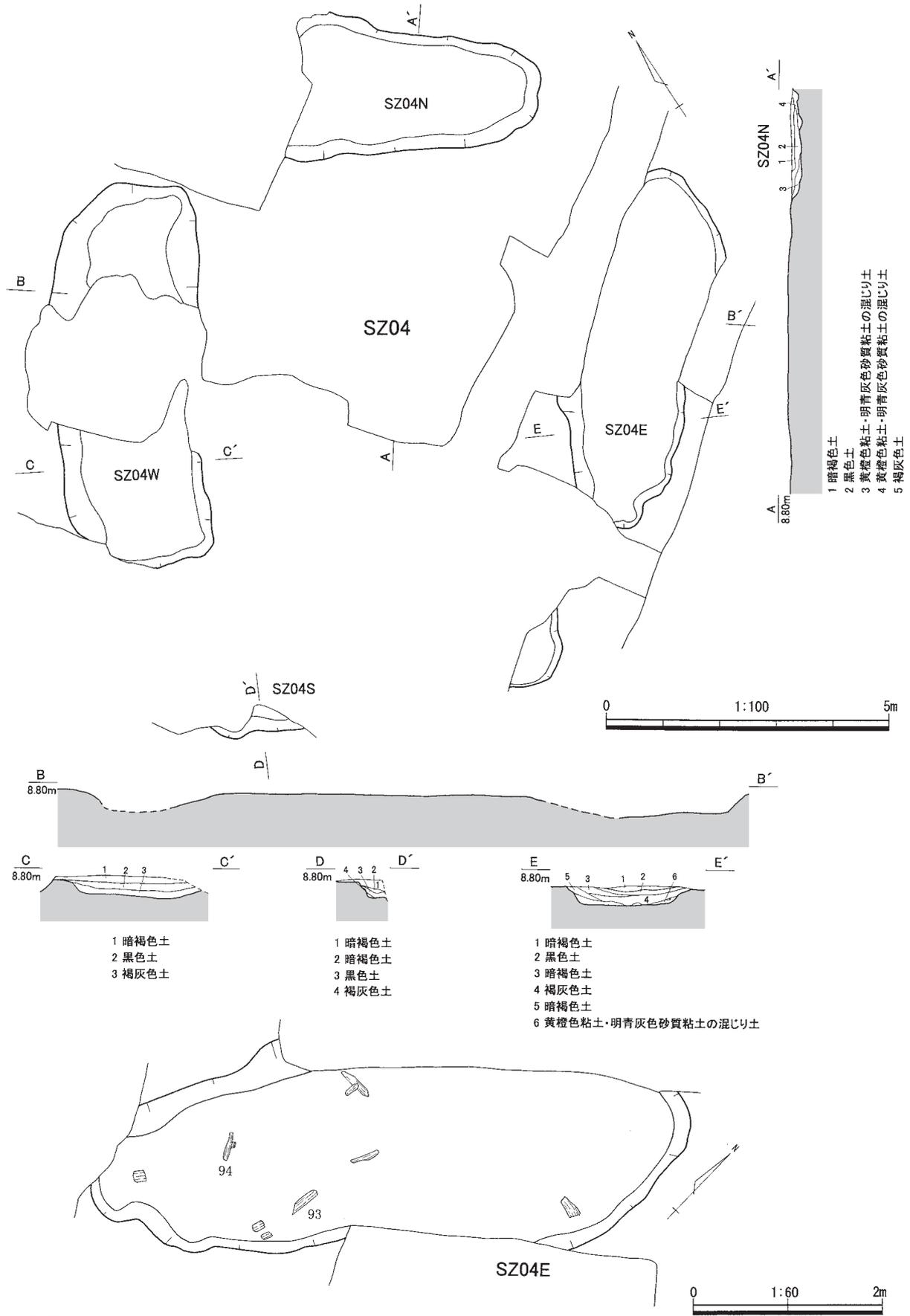
第9図 A区下層全体図



第10図 SZ01・SZ02実測図



第11図 SZ03・SZ05実測図



第12図 SZ04実測図

代編製品とみられる遺物が発見されたが、残存状況が極めて悪く、形状を保って取り上げることができなかった。その他土器は、周溝S Z04Eで第16図13・15の壺、周溝S Z04Wで第16図14の壺及び16の甕、周溝S Z04Nで第16図17の壺がそれぞれ出土している。

### S Z05 (第11図)

D4・5区、E4・5区で検出された方形周溝墓で、西側から南側にかけては調査区外となる。遺構の規模は明確ではないが、東西9m程度、方台部の東西は6.2mと考えられる。主軸方向はN-45°-Eで、S Z01~04よりも10°程度東に振れるとみられる。周溝は四隅が切れており、比較的残りのよい周溝S Z05Nでみると、長さ4.2m、最大幅2.4m、検出面からの深さは37cmであった。覆土は黒色粘土、暗褐色粘土を主体とし、下層には地山土のブロックを含む。S Z05では墳丘を形成していたとみられる盛土が確認された。盛土はV層上に約20cmの厚みをもって検出され、IV・V・VI層が混在した土層の状況から、周溝掘削土を含む周辺土を使用しているものと思われる。盛土の最上層からは第18図74の敲石が出土している。明確な主体部を確認することはできなかったが、盛土を除去すると、V層・VI層に掘り込まれた不整形な落ち込みが確認された。主体部とも考えにくく、また地業としても不自然であるため、その性格は不明である。遺物は周溝S Z05Eから第16図18・20の壺及び21の甕、周溝S Z05Nから第16図19・22の甕、墳丘盛土内から第16図23の甕がそれぞれ覆土中から出土している。

### (2) 土坑 (第13・14図)

A区下層ではS K01~24の24基の土坑が確認されている。しかし、これまで見てきたように調査区内は攪乱が全域に及び、破壊されているものも多い。

S K01はB5区で検出された不整形な土坑で、北半は攪乱により破壊される。遺構の規模は長軸の残存長87cm、短軸68cm、深さ14cmである。覆土下層にはV層のブロックを多量に含んでいる。方形周溝墓S Z01、S Z03と隣接するが、これらとの関連は明らかでない。

S K02はB4区、C4区で検出された長楕円形の土坑である。遺構規模は長軸2.4m、短軸1.2m、深さ27cmである。第16図24の台付甕が出土している。

S K03はB4区、C4区で検出された不整形な土坑である。遺構規模は長軸2.0m、短軸1.6m、深さ20cmである。覆土の暗褐色土にはV・VI層土のブロックが含まれる。第16図25の壺、26の甕が覆土中から出土している。

S K04はC4区で検出された長楕円形の土坑で、北側はS D01と重複するが、新旧関係は明確でない。遺構規模は長軸の残存長1.9m、短軸0.84m、深さ18cmである。覆土は褐色土と黒色土が互層状に堆積し、下部には黄灰色細砂を含んでいる。

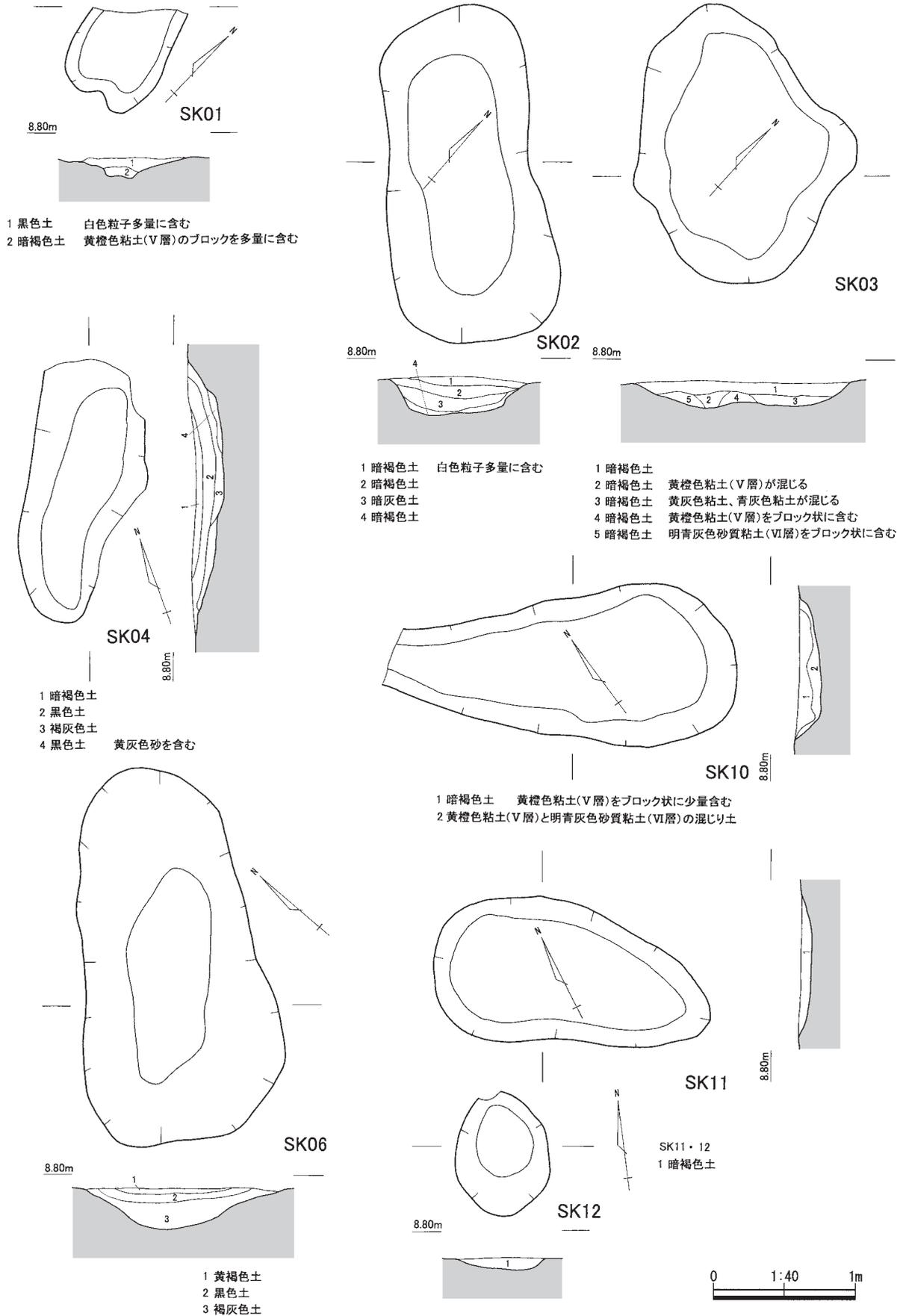
S K06はC4区で検出された長楕円形の土坑である。遺構の規模は長軸2.7m、短軸1.4m、深さ30cmで、壁面途中から緩やかに立ち上がる形状となる。第16図27・28の壺体部が出土している。

S K10はD4区で検出された不整形な土坑である。北側は攪乱によって失われており、遺構の規模は長軸の残存長2.5m、短軸1.2m、深さ17cmの規模であった。覆土は暗褐色土を主体とするが、V層とVI層がブロック状に混ざって堆積している。

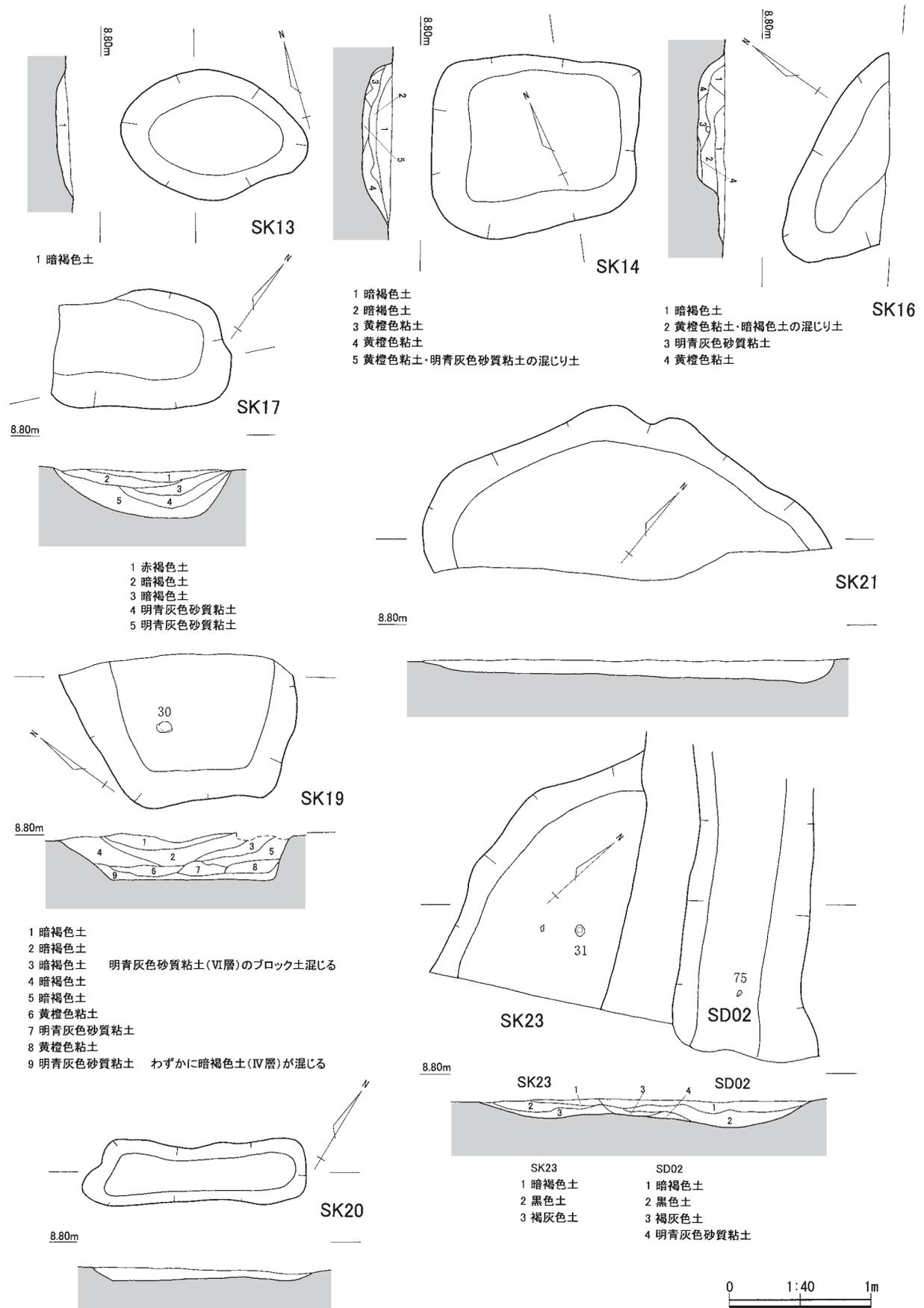
S K11はE4区で検出されたやや不整形な楕円形を呈する土坑である。遺構規模は長軸2.0m、短軸1.1m、深さ10cmであった。

S K12はS K11の南に近接する楕円形の土坑である。遺構規模は長軸0.9m、短軸0.7mで、検出面からの深さは7cmと極めて浅い。

S K13はS K11の東に近接するやや不整形な楕円形を呈する土坑である。長軸1.3m、短軸0.9m、深さ12cmである。



第13図 土坑実測図1



第14図 土坑実測図2

S K 14はE 4区で検出され、S K 13の北側に隣接する。S D 03と重複し、これよりも新しいと考えられる。遺構は不整形な隅丸方形形状を呈し、規模は主軸1.4m、短軸1.3m、深さ22cmであった。S K 11～14は近接し、覆土も類似することから、同時期に掘り込まれた可能性が高い。

S K 16は調査区南東端のE 4区で検出された土坑で、長楕円形を呈するとみられるが、東半は調査区外となるため判然としない。遺構の規模は長軸1.4m、短軸0.7mが確認され、深さは19cmであった。覆土はS K 14と似通っており、一連の遺構の可能性はある。第16図29の甕体部破片が覆土中から出土している。

S K 17はS K 12の北西に隣接する形で検出された土坑で、西半は攪乱によって失われているため、判然としないが、楕円形を呈するとみられる。遺構の規模は長軸1.3m、短軸0.8mが確認され、深さは35cmであった。

S K 19はD 3区で検出された土坑で、東半が調査区外となるため明確ではないが、不整形な隅丸方形を呈するとみられる。長軸1.6m、短軸1.0m分が検出され、深さは30cmであった。覆土は暗褐色土を主体とし、中層以下にVI層などのブロックを含んでいた。底面から10cm程度浮いた中層で第16図30の壺底部が出土している。

S K 20はB 5区で検出された長楕円形の土坑で、S D 04と重複し、これを切っている。遺構の規模は長軸1.6m、短軸0.5mを測り、深さは9cmと極めて浅い。

S K 21はS K 22と隣接してD 4区で検出された土坑である。南側半分は攪乱によって失われているが、長軸2.9m、短軸1.2m、深さ15cmの規模が確認された。S X 01と重複するが、新旧関係は不明である。

S K 23はD 4区で検出された土坑で、東側をS D 02に切られている。形状は不明瞭であるが、長軸1.9m、短軸1.2m分が確認され、深さは13cmであった。覆土は暗褐色土を主体とし、攪拌された灰色粘土ブロックを含んでいた。底部中央付近で壺の底部第16図31が出土した。S K 21～23は近接し、また規模や形状が類似することから、同一時期の遺構とみられる。

### (3) 溝状遺構

S D 01はC 4区で検出された溝状遺構で、南北を攪乱によって破壊されている。南側でS X 01と繋がる可能性もあるが、判然としない。最大幅0.9m、深さ17cm程度の浅い溝である。

S D 02はD 3・4区、E 4区にかけて、延長16.0mにわたって検出された溝状遺構である。北側は攪乱によって失われ、南側ではS Z 05の周溝S Z 05 Eと重複する。第15図に示したS Z 05 E及びS X 02の南壁土層断面ではS D 02の覆土が確認されないため、S Z 05よりも古い段階の遺構と考えられる。遺物は第16図32・33の壺、第16図34の甕及び37の壺、第18図75の石器未製品とみられる石製品が出土している。

S D 03は調査東端のE 3・4区で検出された溝状遺構で、調査区西端にかけて弧状を呈して延びている。確認された延長は9.0m、最大幅1.3m、深さは14cmであった。S D 03の西側に沿って、地山のV層が細長い低い高まりとして認識されている。方形周溝墓が廃絶した後、調査区周辺は水田耕作地化していくことが想定されるが、この高まりは水田耕作に伴う畦畔の痕跡、いわゆる疑似畦畔の可能性が高い。S D 03は畦畔に沿って耕作痕が深く及んだ痕跡とも考えられる。遺物は第16図35の壺肩部、36の壺底部が覆土から出土している。

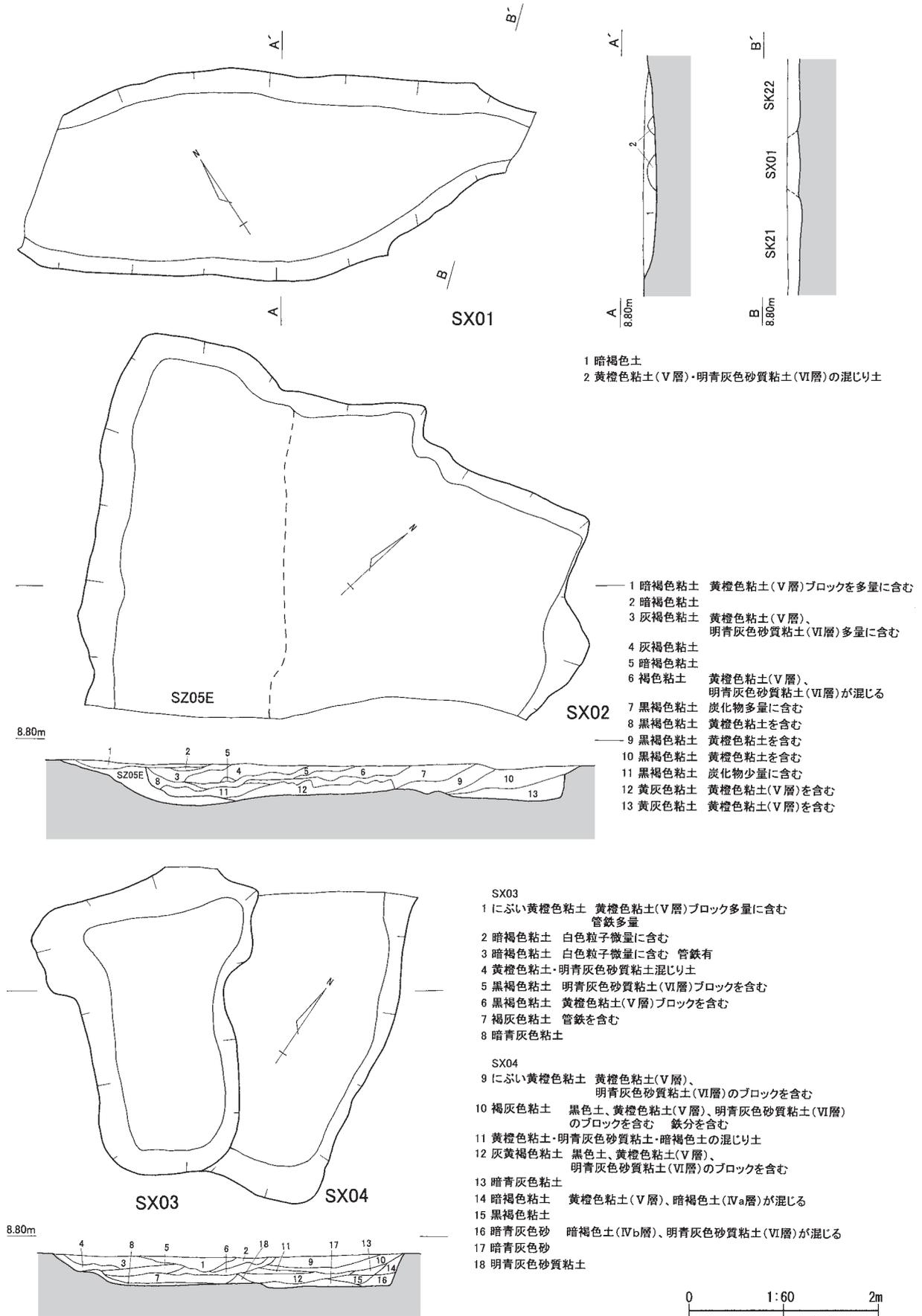
S D 04はB 5区で検出された溝状遺構で、北側は攪乱により失われ、中央部ではS K 20に切られている。延長6.9mが確認され、幅0.2m、深さ6cmと極めて小規模な遺構である。方形周溝墓S Z 01、S Z 02と隣接する。重複しないとみられるため、同時期に存在した可能性はあるが、関係については不明といわざるを得ない。

(4) 性格不明遺構（第15図）

S X01は調査区中央付近で検出されているが、東西は攪乱によって不明瞭となっている。長軸5.0m、短軸2.2mの規模が確認され、深さは15cm程度であった。極めて緩やかな傾斜を持つ楕円形の落ち込みであるが、西で検出されたS D01に繋がる可能性もある。S K21とS K22と重複しているが、新旧関係は不明瞭であった。遺物は第16図38の甕、第18図76の剥片が出土している。

S X02はS Z05の周溝S Z05Eを半分以上破壊して掘られた大規模な遺構で、南北5.4m、東西9.0m、検出面からの深さは30cmであった。平面形は不整形で、床面の凹凸が顕著である。形態から有東遺跡第16次調査などで検出されている「土取り状遺構」に類似する遺構と考えられ（註1）、有東遺跡で頻繁に出現する遺構とされる。覆土はIV層、V層、VI層をブロック状に含み、掘り込みの東側から埋め戻されたような堆積を示す。第18図77の打製刃器が覆土から出土している。

S X03とS X04は2基が切り合って検出された不整形な形状の土坑で、S X02同様、土取り状遺構と考えられる。S X03は長軸3.2m、短軸2.3m、深さは32cmである。S X04は北側が調査区外となるが、長軸3.4m、短軸1.8mの規模が確認され、深さは34cmであった。両者は形状や深さが類似しており、土層断面の観察ではS X03が最初に掘削され、S X03がある程度埋まった後、S X04が掘り込まれた様子が窺える。S X03・S X04ともに覆土にはIV・V層土がブロック状に含まれ、複雑に堆積することもS X02と類似する点といえる。S X04の覆土から第16図39の甕が出土している。



第15図 SX01~04実測図

### 第3節 A区の出土遺物

#### 1 土器 (第16・17図)

2号畦畔のI層土で出土した1は土師器坏の底部であるが、摩滅が激しく調整は不明であった。古墳時代後期に位置づけられる遺物であろう。2・3は5号畦畔構築土のIII層から出土しており、2は折り返し口縁を持つ壺、3は甕の口縁部破片である。いずれも弥生時代後期の土器である。

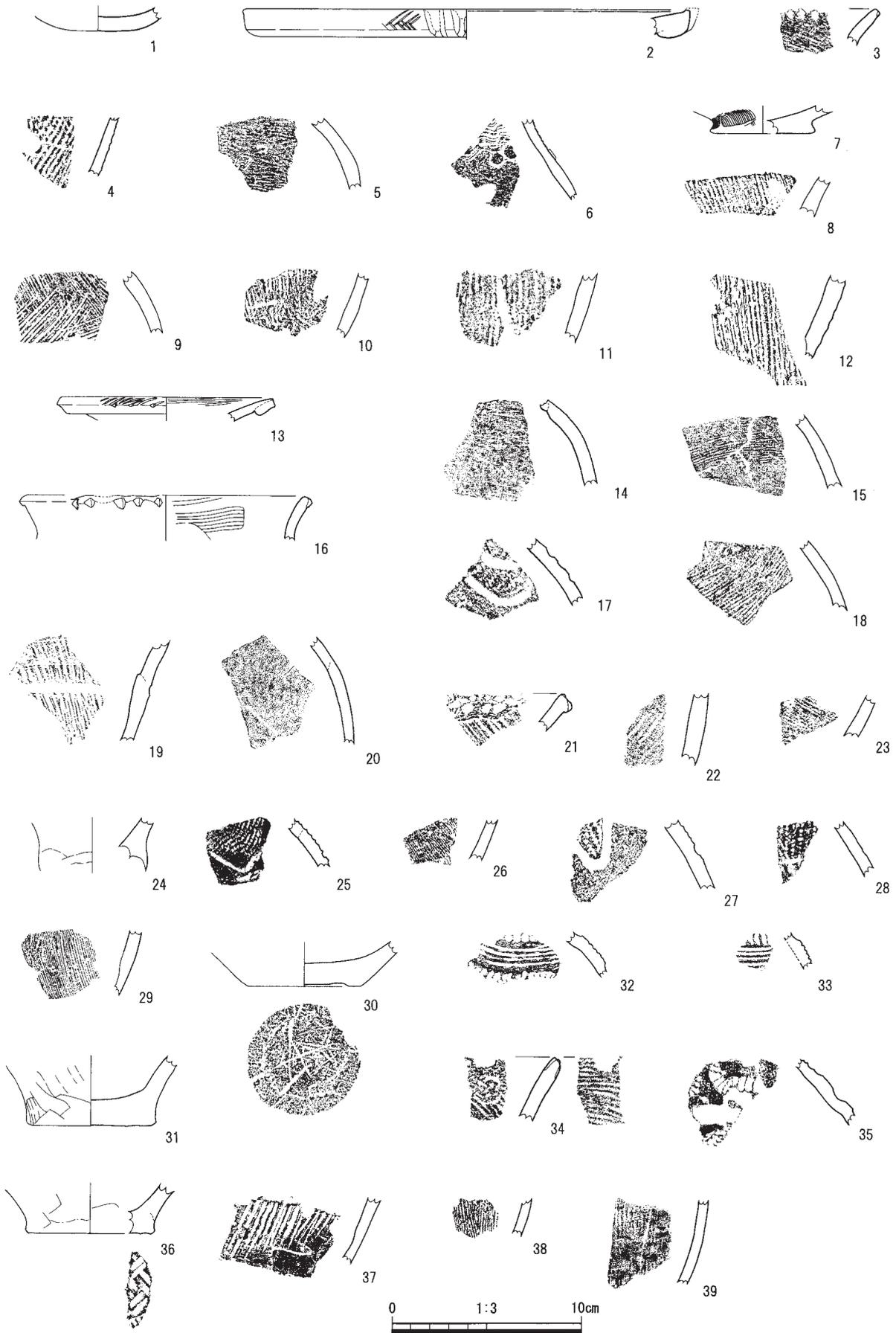
4はS Z01出土の甕体部破片である。外面に粗いハケ調整が認められる。5～8はS Z02出土土器で、5・6は壺体部、7は壺底部、8は甕の体部である。6は頸部に波状文と円形浮文が付けられる。弥生時代後期前半の土器であろう。7は底部近くに目の細かいハケ調整が残る。9～12はS Z03出土土器である。9は壺体部で、縦位のハケ調整の後、斜位のハケが重ねられる。10～12は甕体部で、いずれも粗い縦位のハケ調整がなされる。13～17はS Z04出土土器である。13は折り返し口縁壺の口縁部である。14・15は壺の肩部で、摩滅が激しいが、横位方向のハケ調整の痕跡が観察される。16は甕の口縁部で、外面にはススが付着し調整が不明瞭である。17は壺の肩部であるが、太い沈線で区画し、縄文で内部を充填する。弥生時代中期中葉頃の土器であろう。18～23はS Z05出土土器である。18・20は壺の肩部破片である。いずれも縦位あるいは斜位の細かいハケ調整がなされる。21は甕口縁で口縁端部及び口唇部に工具による刻目が入れられ、外面は斜位のハケ調整がなされる。19・22・23は甕の体部破片で、19は縦位のハケ調整の上から横位の磨消線文が観察される。弥生時代中期後半の古い段階に位置づけられよう。

24はS K02出土土器で、甕の体部と脚部の接合部である。25・26はS K03出土土器である。25は壺の体部で、沈線区画内は縄文で施文され、胎土には雲母が顕著に観察される。26は甕体部で、斜位のハケ調整がなされる。27・28はS K06出土土器である。いずれも壺体部で、縄文による施文がなされている。29はS K16出土土器である。甕の体部で、外面に目の細かい縦位のハケ調整がなされる。30はS K19出土土器である。壺の底部で、外面はミガキ調整がなされ底部には木葉痕が観察される。31はS K23出土の壺底部である。

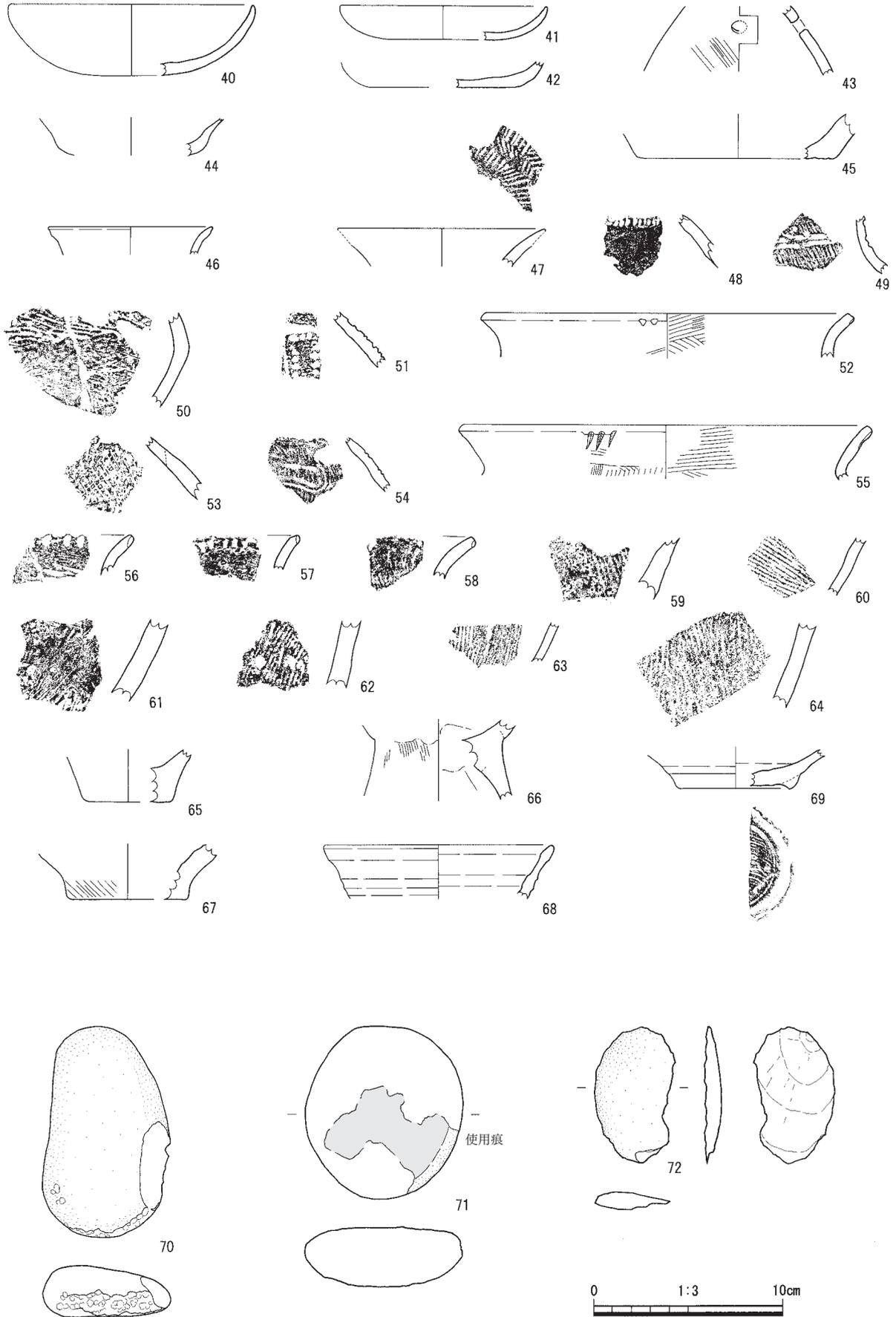
32～34・37はS D02出土土器である。32・33・37は壺体部破片で、32・33はミガキ調整の後に櫛描による並行沈線を入れ、その上下に連続爪形文を施す。外面には赤彩がなされる。37は外面に粗い縦位のハケとミガキによる調整がなされ、赤彩が施される。34は甕口縁部で、内外面ともにハケ調整が観察される。35・36はS D03出土土器である。35は壺体部で、連続爪形文による弧文が施され、外面には赤彩がなされる。嶺田式の特徴を持つものである。36は壺底部で、底部に網代痕が残される。

38はS X01出土土器である。甕の体部で、外面には縦位のハケが残る。39はS X04出土土器で、甕の体部破片である。摩滅が顕著だが、外面に縦位のハケ調整がなされる。

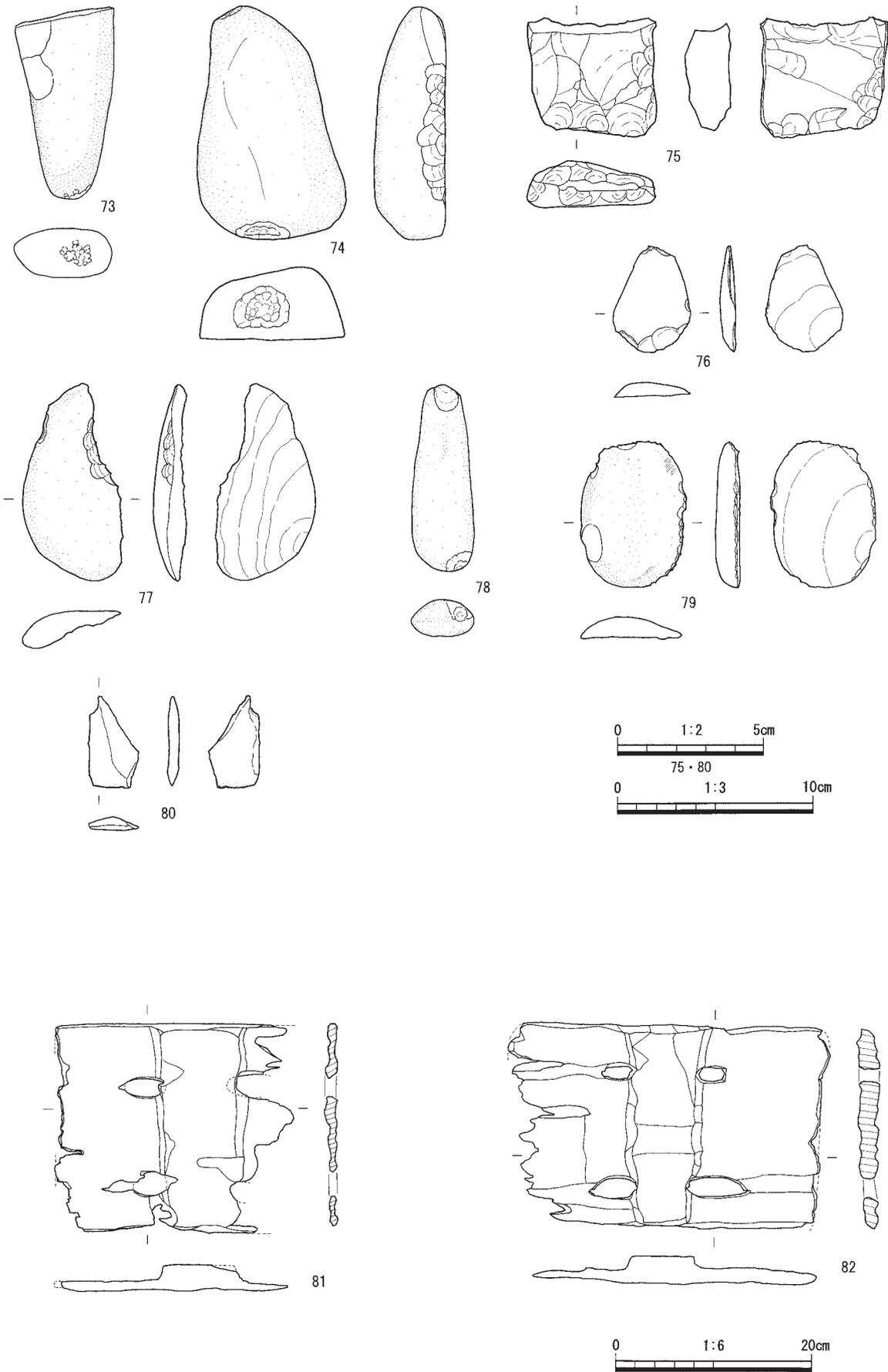
40～69は遺構外出土土器である。40～42は土師器坏である。いずれも摩滅が顕著で調整は不明瞭であるが、古墳時代後期の所産であろう。43・44は高坏である。43は脚部で、円形の透かしが入れられる。44は坏部の体部であろう。45は壺底部、46・47は壺口縁部破片である。47は摩滅が顕著であるが、内面に羽状文が施される。48～51・53・54は壺体部破片である。48は外面に連続爪形文による横線文と赤彩が特徴的な嶺田式に相当する土器である。49は縦位のハケの後、連続横線文が施される。50は不明瞭であるが、外面に粗い波状文らしき施文がみられる。51は沈線内に連続した刺突文が施される。53は浅い格子状のハケ目が観察され、54は沈線文がわずかに観察される。52・55～64は甕である。52・55～58は口縁部破片で、いずれも口唇部に刻みが施され、内外面はハケ調整がなされる。59～64は体部破片である。65・67は壺の底部である。67は外面にハケの痕跡が残るが、いずれも摩滅が顕著である。66は甕の体部と脚部の接合部分で、被熱が顕著である。68は須恵器坏の口縁部である。奈良時代の所産であろう。69は灰釉陶器の底部である。胎土が均質であり、遠江地域から搬入された平安時代中期の製品とみられる。



第16図 A区出土土器実測図



第17図 A区出土土器・石製品実測図



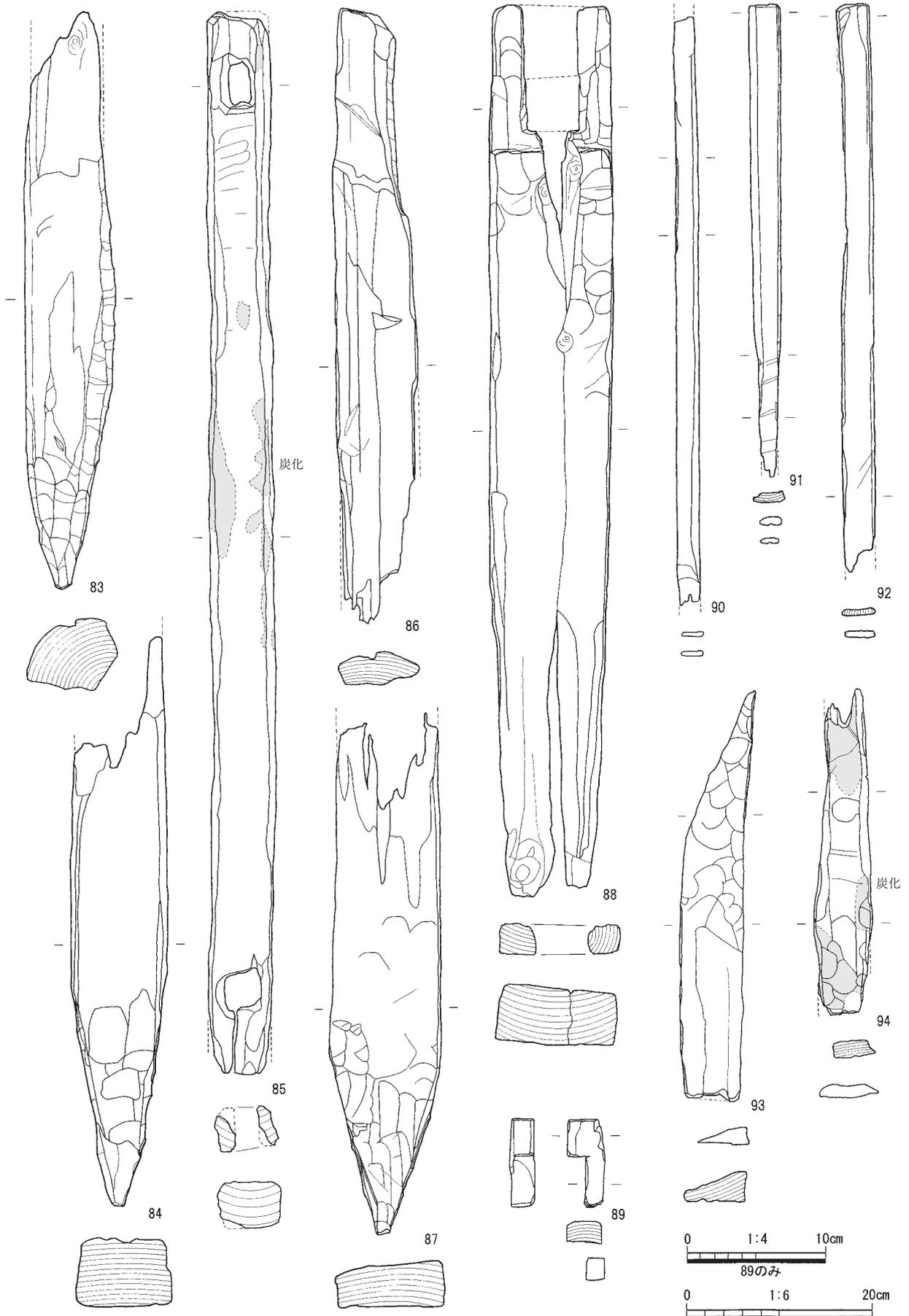
第18図 A区出土石製品・木製品実測図

## 2 石製品（第17・18図）

71はS Z02出土の磨石であるが、表面がかなり剥落しており、使用痕が一部に確認されるのみである。表面がかなり脆くなっていることから、被熱している可能性もある。72・73はS Z03出土石製品である。72は剥片を利用した打製刃器で、使用痕が残る。73は敲石であるが、上部を欠損している。74はS Z05出土の敲石である。上下に敲痕があり、側面は持ちやすいように敲いて凹ませている。75はS D02出土の石製品で、石斧などの未製品かと思われ、上部は欠損している。S X01出土の76、S X02出土の77はいずれも打製刃器である。77は持ちやすいように側面の一部を打ち欠いて加工している。70・78～80は遺構外出土石製品である。70・78は敲石である。79は打製刃器で、側面に使用痕が認められる。80は黒色粘板岩の剥片の一部を研磨して刃を造り出した磨製刃器である。欠損部分が多く、全体の形状は明らかでない。

## 3 木製品（第18・19図）

四ツ穴田下駄81・82は5号畦畔上に一部が重なった状態で2点出土した。おそらく一対になるものであろう。脆弱であったため現地調査では発泡ウレタン剤を用いて土ごと取上げている。田下駄は逆台形に近い形状で2点ともヒノキの柁目材で作られている。全体に腐食や破損が激しく、成形時の加工痕や緊縛の痕跡は見られない。田下駄の中央には隆起部があり1.6cmほどの厚みを持っている。孔は隆起部の両脇に4箇所ある。83～89は畔の杭や横木である。83・84は1号畦畔より出土した。83はイヌマキの丸太から1/4分割された材で丸木面が残っている。手斧で先端を尖らせ杭として使っている。84はスギの角材である。もともと建築材として使用されていたものであろうが、手斧で先端を尖らせ杭に転用している。85は2号畦畔より出土した。長さ120cmの角材で、ほぼ完形に近いものである。材の角は面取り整形され、両端部に方形～長方形の柄孔がある。表面の一部は炭化している。柄孔の中心間は99.2cmと約1mある。横架材等の用途が考えられる。86～88は4号畦畔より出土した。86は丸太からの分割材である。図の上部は側面の一部が手斧で削られ炭化している。87は幅12cm、厚みが5cmの整形板である。下端部は杭状に尖らせてあるが、再加工前は建築材として使われていたものであろう。88は接合資料である。建築材として使われていた板を分割して杭に使用している。残存長は98.4cm、厚みのあるスギの板目材である。6cmほどの厚みがあるが上部の16cmほどは半分の厚さに欠き込まれている。さらにそこへ6cmほどの方形孔を切り込んでいる。建築材であろうが、用途は台輪もしくは大引などで、柄孔には柱を通した可能性がある。89は6号畦畔周辺で出土した。モミの板目材で作られた製品で完存している。裏面は割面のままであるがその他の面は加工してある。上部から2.7cm下を切り欠いてある。ダボ栓として使われていたものであろうか。90～92は方形周溝墓S Z01、93・94は方形周溝墓S Z04の周溝底から出土した。90～92はスギの薄く細長い板で板目材や柁目材がある。周溝の底に複数枚貼り付いていたが用途は不明である。93と94は遺構覆土層より出土した。どちらもカヤの板目材である。人為的な加工がなされた痕はあるが、いずれも用途不明品である。93は表面に整形時の手斧痕がある。94は火を受けて炭化しているが、表面には手斧で整形された痕跡が見える。



第19図 A区出土木製品実測図

## 第4節 B区の検出遺構

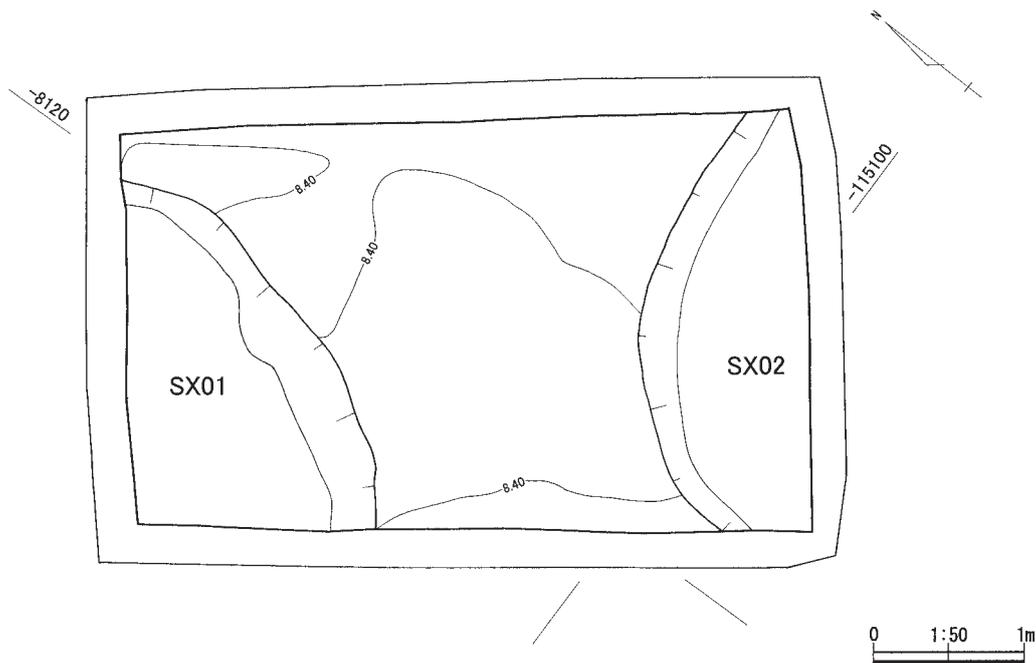
### 1 上層遺構（第20図）

上層遺構として8層上面で落ち込み状の遺構を2基検出した。調査区北側がS X01、南側がS X02として把握したが、いずれも調査区外に続いているため、本来の規模及び形状は全く不明である。深さは最深部でもS X01が14cm、S X02が13cmとかなり浅く、壁面は緩やかに立ち上がっている。遺構の平面形を確認するのは極めて困難であったため、覆土である黒褐色粘土に灰色粘土のブロックを多量に含む範囲をもって遺構検出を行っている。覆土の黒褐色粘土は、内部に含まれる灰色粘土ブロックとともに巻き上がっている様子も確認されることから、水田耕作による攪拌が深く及んだことによって生じた落ち込みの可能性がある。S X01からは第22図95～97の壺が出土しているが、下層包含層からの混入とみられる。

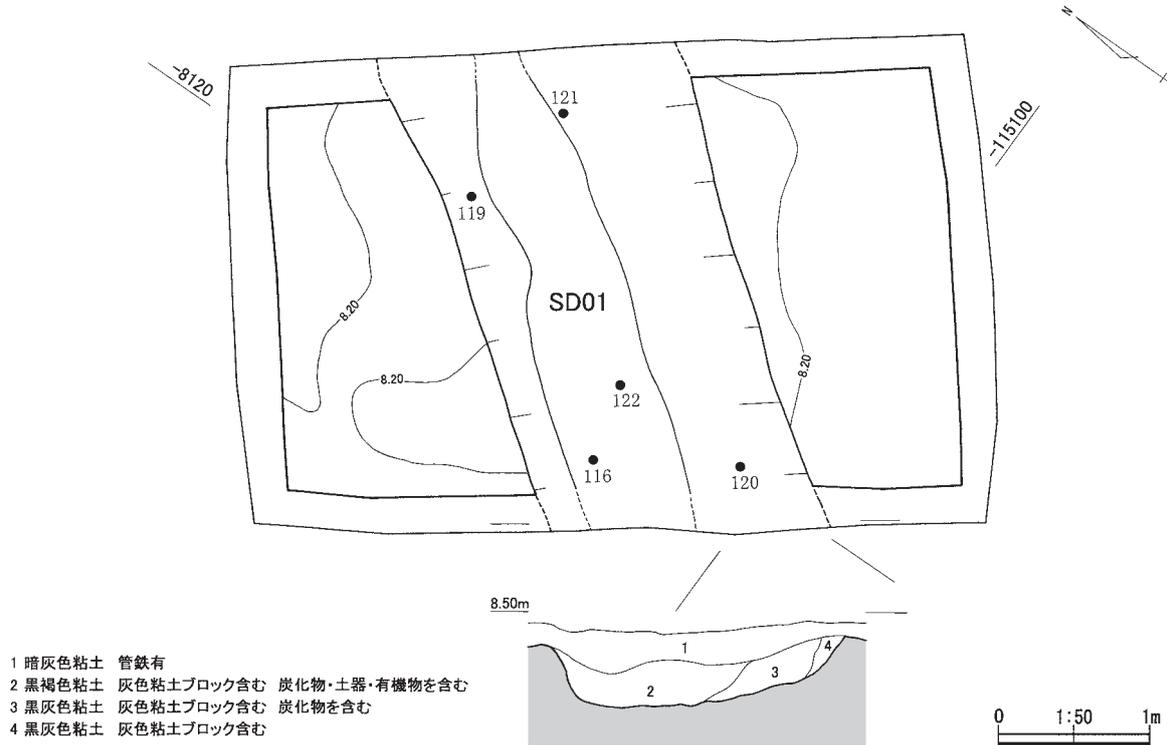
### 2 下層遺構（第21図）

9層の暗灰色粘土上面で検出された下層遺構は、調査区を東西方向に横断する形で検出された溝状遺構S D01である。遺構は調査区外の東西方向に延びており、延長3.3m、最大幅2.0m、最大深さ47cmが確認された。溝の方向はN-40°-Eと推定され、立ち上がりは南が緩やかなのに対し、北側は急であった。南側から埋没している様子が窺え、覆土は黒褐色粘土を主体とし、9層土とみられる暗灰色粘土ブロック、炭化物や有機物を多く含んでいた。下部は10層の灰色細砂層に及んでおり、かなりの湧水がみられた。

遺物は第22図98～101の壺、第22図102の鉢、第22図103～108・第23図109～112の甕の土器、第23図113の台石、114の不明加工石製品が出土している。第24図115～117、119～122の木製品は覆土内から散在する形で出土したが、119の直柄平鋏は北側底面近くに張り付くような形で出土している。これら遺物の多くは覆土の黒褐色粘土上層～中層にかけて出土しているものが大半で、下層では出土遺物は少ない傾向が窺われた。狭小な範囲にも関わらず、溝内から弥生時代後期中葉頃に位置づけられる、多くの出土遺物がみられたことから、S D01の周辺には当該期の集落域が広がる可能性が高い。



第20図 B区上層全体図



第21図 B区下層全体図

## 第5節 B区の出土遺物

### 1 土器 (第22・23図)

95～97は上層遺構のS X01出土土器である。95は壺の口縁部で、折り返し口縁の外面に刻目がみられるが、全体的に摩滅が顕著である。96・97は壺の底部である。96は外面にハケ調整がなされ、底部には木葉痕が残る。97も不明瞭であるが、底部に木葉らしき痕跡がみられる。

98～112はS D01出土土器である。98・99は壺口縁部である。98は外面に横位のハケ調整がなされ、口縁部には6個一組の細い棒状浮文が付けられる。99は内外面ともに細かいハケ調整がなされ、赤彩が施される。内面はハケ調整の後、ミガキ調整されているが、外面は摩滅しているため不明瞭である。100は壺の頸部から肩部の破片である。外面はハケ調整の後、上部に刺突による横線文、その下に櫛描による波状文が施され、わずかに赤彩の痕跡が残る。101は壺の底部である。外面は丁寧にミガキ調整がなされ、ススが多く付着する。102は鉢あるいは広口壺の口縁部である。外面はハケ調整がなされ、口縁端部には工具による刻目が入られる。103・107～111は甕の口縁部である。いずれも口縁部内外面はハケ調整、体部内面はナデ調整がなされ、口縁端部には工具による刻目が施される。109・110は口径16cm前後に復原される比較的小型品である。111は口縁部に斜位、体部に横位の目の粗いハケ調整を施している。口縁よりも胴部が張り、調整も丁寧になされている。104・106は甕の口縁部から体部にかけての破片である。106の外面及び口縁内面は横位のハケ調整がなされ、体部内面は板状工具によるナデ調整がなされる。105・112は甕の脚部である。105は直接接合しないものの、104と同一個体とみられる。112は被熱が顕著で、内外面ともにハケ調整がみられる。

## 2 石製品（第23図）

石製品はいずれもS D01から出土している。113は台石で、石の中央部に敲石による打痕が無数に残る。114は用途不明の加工石製品である。およそ半分ほどが欠損しているため、全体の形状は不明であるが、全体的に磨いて加工しているように見受けられる。直径1 cm前後の穿孔が2箇所認められ、また側面は黒色に処理されているようである。

## 3 木製品（第24図）

115は楕円形の削り物である。全体形は小判形を呈し、底部も同形の平底である。内面は丁寧に磨かれているが、外面には一部加工時の手斧痕が見える。材質はヤマザクラで、木目は横木取り柾目である。広葉樹を使う事例は、浜松以西の関西地方ではごく一般的なもので容器の素材としては合致している。116はスギ材で作られた製品で、楕円形容器の脚部分と思われる。上面等欠損しているが成形時の加工痕が全面に残っている。非常に丁寧に加工されているものである。脚部だとすると長軸径は15cmほどであると想定される。坏部は楕円形の小型の槽などの可能性があり、池上曾根遺跡（大阪府）で類似する出土例がある。

117は鍬である。所謂、「東海系曲柄鍬」（註2）と呼ばれる形式の鍬身の軸部である。樹種は鍬鋤には一般的に多用されるアカガシ亜属である。全体にやや腐食しているものの、軸部の断面は楕円形に成形されている。下端部は欠損しているが、すぐ下には身部があったと思われる。118も鍬である。直柄平鍬の身で、柄孔に近い部分の破片である。柄孔の形状から丸柄であろう。柄孔にしては大きいのが、著しく風化してやや収縮・変形しているのが原因であろう。表・裏の別や柄孔の角度は不明である。樹種はイチイガシ（註3）の追柾目材である。119は直柄平鍬の身である。身幅からして広鍬の範疇に入る。鍬身は1/2ほど残存しており、上部の柄孔付近は欠損している。幅狭の柄孔からなで肩のように広がり、下方は24cmほどの身幅があったであろう。上部は1.5cmほどの厚さを持つが刃先は0.5cm以下と非常に薄い。118と同様にイチイガシの柾目材である。

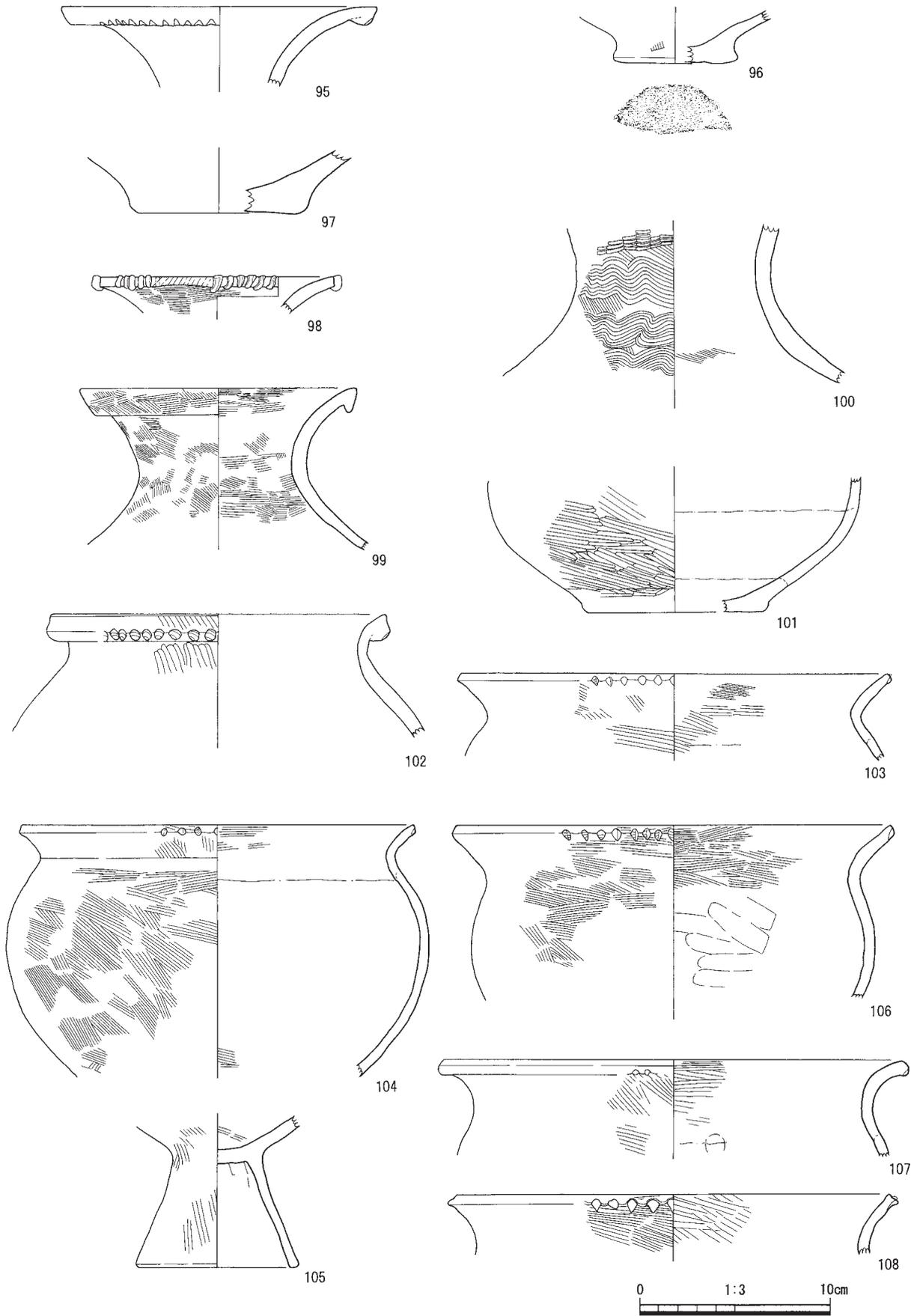
120は長さ47.9cmで上部の両側面を切り欠き、有頭状に加工してある板状製品である。スギの板目材で木目は粗い。有頭部は上端の角を落とし表面は面調整されている。建築材などの構造部材の一部とも考えられる。121は長さ34.6cmの棒状木製品である。材はスギの柾目で木目が細かい。破損品であるため、全体形が掴めず用途不明の木製品とした。特徴としては全面が丁寧に加工され、角を丸くし、棒状の中央が22.7cm幅ほど削られている。方形孔または透かし状の加工であった可能性がある（註4）。透かしの入った脚部の腰掛や方形容器などが考えられる。古墳時代後期の製品であれば中筒受け（紡織具）を考えるとところであるが、本品は弥生時代後期の製品であるため、用途不明とせざるを得ない。122は整形板の端材と思われる。スギの板目材で年輪幅は大きい。板は年輪界に沿って割り出され、湾曲部を面調整して厚みを補正している。補正は木表・木裏面ともしている。板を使っていく過程で出た端材であり、手斧による上下の切断痕は違う手であることがわかる。

註1 静岡市役所岡村渉氏よりご教示を得た。

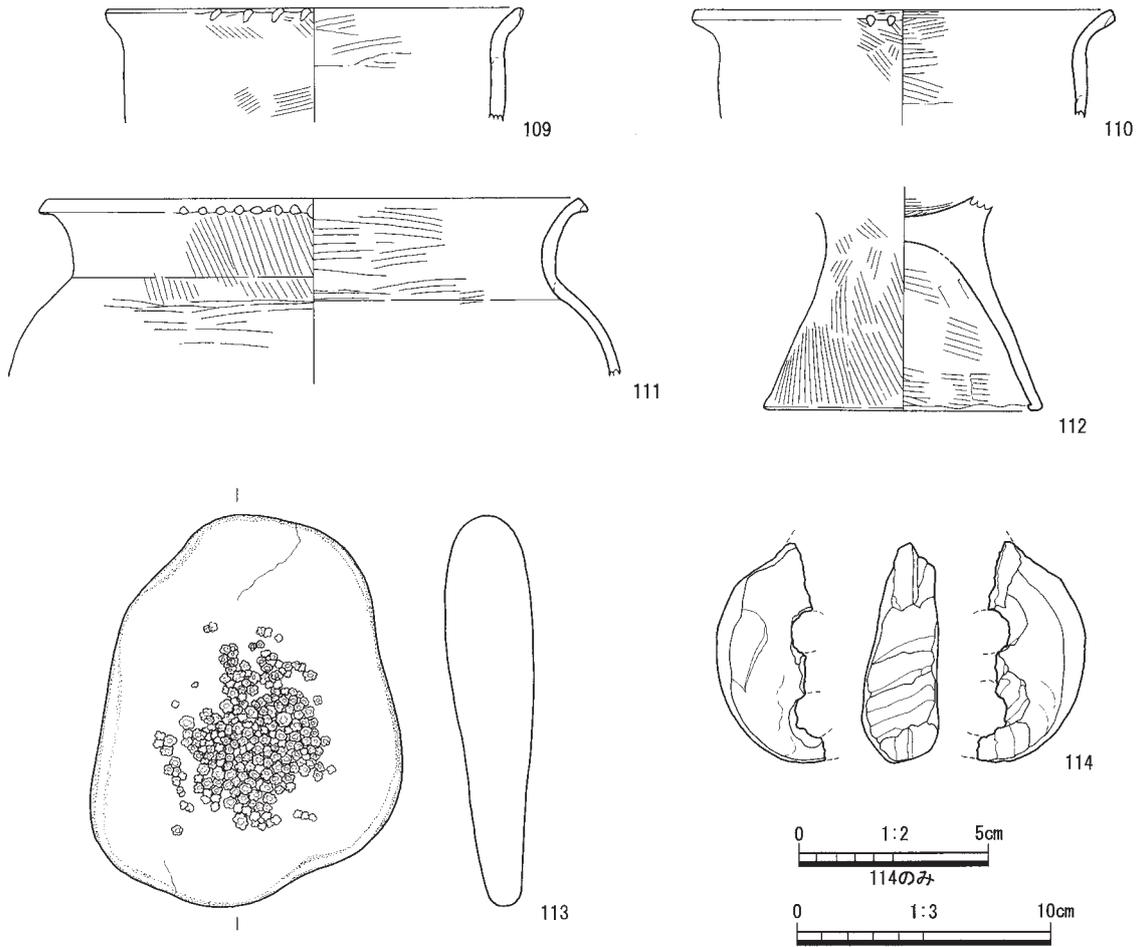
註2 樋上昇氏の分類名による（樋上1994）。

註3 2011年11月に弘前大学にて開催された第26回日本植生史学会大会で、能代修一氏らによる口頭発表のなかで、これまで「アカガシ亜属」と同定されていたものの中から「イチイガシ」を識別することが可能になったとの報告があった。東北大学植物園の鈴木三男氏のご教示による。今後、当センターに保管されている樹種標本の再調査により、県内におけるイチイガシの資源利用が明らかになってくるであろう。

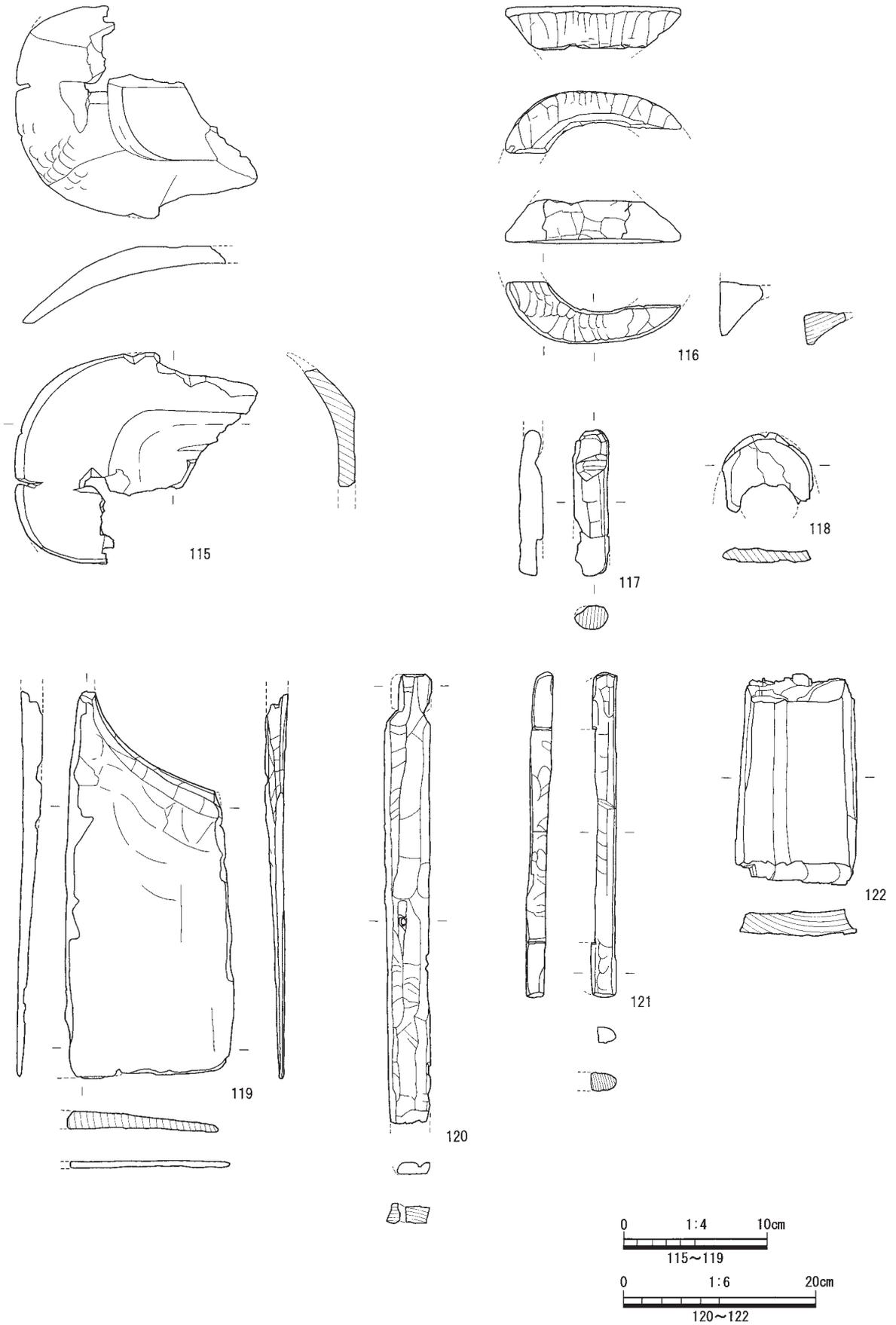
註4 木製品の器種分類については、首都大学東京の山田昌久氏からご教示を得た。福岡県前原市上罐子遺跡等で脚部に透かしの入った削り物が出土している。



第22図 B区出土土器実測図



第23図 B区出土土器・石製品実測図



第24図 B区出土木製品実測図

第1表 出土土器一覧表

挿図 番号	区	グリッド 遺構	層位	種別	器種	部位	残存率	法量(cm)	調整技法・施文	焼成	色調	備考
1	A	2号畦畔	I層	土師器	坏	底部	10%	底径(4.2) 器高(1.3)	(内外面)調整不明	良	10YR6/1褐灰	
2	A	5号畦畔	III層	弥生土器	壺	折り返し 口縁	5%	口径(23.6) 器高(1.5)	(内面)ハケ (外面)口縁部に棒状浮文、刻目	良	7.5Y6/1灰	
3	A	5号畦畔	III層中層	弥生土器	甕	口縁部	5%	器高(2.0)	(内面)ハケ (外面)ハケ、口縁部刻目	良	2.5YR5/6明赤褐	
4	A	SZ01N	覆土	弥生土器	甕	体部	3%	器高(3.2)	(内面)ナデ (外面)ハケ	良	7.5Y7/3にふい橙	
5	A	SZ02W	覆土	弥生土器	壺	肩部	5%	器高(3.6)	(内面)ナデ (外面)ハケ	良	5YR6/6橙	
6	A	SZ02N	覆土	弥生土器	壺	頸部	5%	器高(4.0)	(内面)ナデ (外面)波状文、円形浮文	良	10YR7/4にふい黄橙	
7	A	SZ02N	覆土	弥生土器	壺	底部	20%	底径(5.6) 器高(1.5)	(内面)調整不明 (外面)ハケ	良	10YR7/4にふい黄橙	内外面に赤彩
8	A	SZ02N	覆土	弥生土器	甕	底部付近 の体部	3%	器高(2.1)	(内面)ナデ (外面)ハケ	良	7.5YR7/4にふい橙	スス附着
9	A	SZ03E	覆土	弥生土器	壺	肩部	3%	器高(3.3)	(内面)ナデ (外面)ハケ	良	2.5Y7/3浅黄	
10	A	SZ03W	覆土	弥生土器	甕	体部	3%	器高(3.6)	(内面)ナデ (外面)ハケ	良	7.5YR7/4にふい橙	
11	A	SZ03E	覆土	弥生土器	甕	体部	3%	器高(3.7)	(内面)ハケ (外面)ハケ	良	10YR8/4浅黄橙	
12	A	SZ03E	覆土	弥生土器	甕	体部	3%	器高(4.4)	(内面)ハケ (外面)ハケ	良	10YR8/4浅黄橙	
13	A	SZ04E	覆土	弥生土器	壺	口縁部	10%	口径(11.5) 器高(1.3)	(内面)ハケ (外面)口縁部刻目	良	7.5YR7/3にふい橙	
14	A	SZ04W	覆土	弥生土器	壺	肩部	5%	器高(4.6)	(内面)ハケ、輪積み痕 (外面)ハケか	良	2.5Y8/2灰白	赤彩
15	A	SZ04E	覆土	弥生土器	壺	肩部	5%	器高(4.0)	(内面)ハケ、輪積み痕 (外面)ハケか	良	7.5YR7/4にふい橙	
16	A	SZ04W	覆土	弥生土器	甕	口縁部	10%	口径(15.4) 器高(2.4)	(内面)ハケ (外面)ハケか	良	7.5YR7/6橙	スス附着
17	A	SZ04N	覆土	弥生土器	壺	肩部	3%	器高(3.6)	(内面)調整不明 (外面)沈線縄文	良	10YR6/3にふい黄橙	
18	A	SZ05E	覆土	弥生土器	壺	体部	3%	器高(3.7)	(内面)ナデ (外面)ハケ	良	2.5Y5/1黄灰	
19	A	SZ05N	覆土	弥生土器	甕	体部	5%	器高(5.0)	(内面)ナデ (外面)ハケ、ナデ	良	5YR5/6明赤褐	
20	A	SZ05E	覆土	弥生土器	壺	肩部	5%	器高(5.8)	(内面)ナデ、輪積み痕 (外面)ナデ、ハケ	良	2.5Y7/2灰黄	赤彩か
21	A	SZ05E	覆土	弥生土器	甕	口縁部	3%	器高(1.9)	(内面)ナデ (外面)ハケ	良	2.5Y4/1黄灰	
22	A	SZ05N	覆土下層	弥生土器	甕	体部	3%	器高(3.9)	(内面)ナデ (外面)ハケ	良	5Y4/1灰	
23	A	SZ05	盛土最上層	弥生土器	甕	体部	1%	器高(2.2)	(内面)調整不明 (外面)ハケ	良	10Y3/2オリーブ黒	
24	A	SK02	覆土	弥生土器	台付甕	接合部	10%	器高(2.9)	(内面)ナデ (外面)ナデ	良	5Y6/8橙	
25	A	SK03	覆土	弥生土器	壺	体部	5%	器高(2.6)	(内面)調整不明、輪積み痕 (外面)沈線区内に縄文	良	7.5Y4/1灰	
26	A	SK03	覆土	弥生土器	甕	体部	3%	器高(2.2)	(内面)ハケ (外面)ハケ	良	7.5YR7/4にふい橙	
27	A	SK06	覆土	弥生土器	壺	体部	3%	器高(3.5)	(内面)ナデ、輪積み痕 (外面)沈線区内に縄文	良	10YR7/4にふい黄橙	
28	A	SK06	覆土	弥生土器	壺	体部	3%	器高(3.0)	(内面)調整不明 (外面)縄目	良	5YR3/3暗赤褐	
29	A	SK16	覆土	弥生土器	甕	体部	3%	器高(3.5)	(内面)ハケ (外面)ハケ	良	5Y6/1灰	
30	A	SK19	覆土	弥生土器	壺	底部	90%	底径(6.0) 器高(2.4)	(内面)調整不明 (外面)ミガキか	良	2.5Y8/2灰白	
31	A	SK23	覆土	弥生土器	壺	底部	99%	底径(6.8) 器高(4.8)	(内面)調整不明 (外面)ハケか	良	10YR3/2黒褐	
32	A	SD02	覆土	弥生土器	壺	肩部	5%	器高(2.4)	(内面)ナデ (外面)ミガキのち櫛描き平行沈線、上下に連続爪形文	良	10YR4/1褐灰	外面赤彩
33	A	SD02	覆土	弥生土器	壺	体部	1%	器高(1.9)	(内面)剥離 (外面)櫛描き平行沈線、上下に連続爪形文	良	10YR6/3にふい黄橙	外面赤彩
34	A	SD02	覆土	弥生土器	甕	口縁部	5%	器高(3.5)	(内面)ハケ (外面)ハケ	良	5YR4/4にふい赤褐	
35	A	SD03	覆土	弥生土器	壺	肩部	5%	器高(3.5)	(内面)ナデ (外面)連続爪形文、平行沈線	良	10YR8/4浅黄橙	外面赤彩
36	A	SD03	覆土	弥生土器	壺	底部	10%	底径(6.8) 器高(2.7)	(内面)ナデ (外面)ナデ、底部付近に輪積み痕	良	5YR4/4にふい赤褐	底部に網状痕
37	A	SD02	覆土	弥生土器	壺	体部	5%	器高(3.5)	(内面)ナデ (外面)ハケ、ミガキ	良	10YR5/2灰黄褐	外面赤彩、スス附着
38	A	SX01	覆土	弥生土器	甕	体部	1%	器高(2.0)	(内面)ナデ (外面)ハケ	良	2.5Y7/3浅黄	
39	A	SX04	覆土	弥生土器	甕	体部	5%	器高(4.5)	(内面)ナデ (外面)ハケ	良	2.5Y7/2灰黄	
40	A	D4区	I b層	土師器	坏	口縁部～ 底部	20%	口径(12.8) 器高(3.7)	(内面)ナデ (外面)ナデ	良	2.5YR5/6明赤褐	
41	A	E4区	I b層	土師器	坏	口縁部～ 底部	15%	口径(11.0) 器高(1.8)	(内面)ナデ (外面)ナデ	良	7.5YR8/3浅黄橙	
42	A	E5区	III層	土師器	坏	底部	10%	器高(1.4)	(内面)調整不明 (外面)板ナデ	良	5YR7/6橙	
43	A	D5区	IVb層	弥生土器	高坏	脚部	5%	器高(4.1)	(内面)調整不明 (外面)ハケ	良	5YR6/6橙	
44	A	遺構外	I b層	土師器	高坏	体部～ 底部	10%	器高(2.0)	(内面)ナデ (外面)ナデ	良	7.5YR8/6浅黄橙	
45	A	E4SW区	IVb層	弥生土器	壺	底部	10%	基部径(10.2) 器高(2.4)	(内外面)調整不明	良	7.5YR8/3浅黄橙	
46	A	E4区	I b層	土師器	壺	口縁部	5%	口径(4.7) 器高(1.5)	(内面)ナデ (外面)ナデ	良	10YR6/3にふい黄橙	
47	A	B4区	III～IVa層	弥生土器	壺	口縁部	10%	口径(11.0) 器高(2.0)	(内面)羽状文 (外面)調整不明	良	2.5YR6/1黄灰	
48	A	E4NE区	V層	弥生土器	壺	肩部	5%	器高(3.7)	(内面)連続爪形文 (外面)ミガキ	良	2.5Y7/3浅黄	外面赤彩
49	A	遺構外	IVb層	弥生土器	壺	頸部	5%	器高(3.0)	(内面)ナデ (外面)ハケ、横線文	良	2.5YR3/1暗赤灰	
50	A	D4区	IVb層	弥生土器	壺	体部	10%	器高(5.0)	(内面)調整不明 (外面)波状文か	良	2.5Y8/2灰白	スス附着
51	A	E4区	IVa層	弥生土器	壺	肩部	3%	器高(3.0)	(内面)調整不明 (外面)沈線区内に刺突文	良	5Y5/1灰	
52	A	トレンチ	一括	弥生土器	甕	口縁部	5%	口径(19.6) 器高(2.4)	(内面)ハケ (外面)横ナデ、下部ハケ	良	2.5YR6/6橙	スス附着
53	A	E4NW区	V層上面	弥生土器	壺	体部	3%	器高(3.4)	(内面)調整不明 (外面)格子状ハケ目	良	5YR7/6橙	
54	A	E3区	IVb層	弥生土器	壺	肩部	3%	器高(2.8)	(内面)ナデ、押圧痕あり (外面)ハケのち沈線文	良	2.5YR3/1暗赤灰	
55	A	トレンチ	一括	弥生土器	甕	口縁部	5%	口径(21.8) 器高(2.9)	(内面)ハケ (外面)ハケ	良	5YR7/6橙	
56	A	B5区	V層上面	弥生土器	甕	口縁部	5%	器高(2.1)	(内面)ナデ (外面)ハケ	良	10YR8/3浅黄橙	スス附着
57	A	C5NE区	IVb層	弥生土器	甕	口縁部	5%	器高(1.9)	(内面)ナデ (外面)ハケ	良	5YR6/6橙	
58	A	E3SW区	V層上面	弥生土器	甕	口縁部	5%	器高(2.3)	(内面)調整不明 (外面)ハケ	良	5YR5/6赤褐	スス附着
59	A	B5区	IVb層	弥生土器	甕	胴部	3%	器高(3.2)	(内面)斜位ハケ (外面)ハケ	良	5YR6/6橙	
60	A	遺構外	IVb層	弥生土器	甕	肩部	3%	器高(3.1)	(内面)板ナデ (外面)ハケ	良	7.5YR7/6橙	スス附着
61	A	D4SW区	V層上面	弥生土器	甕	胴部	5%	器高(4.5)	(内面)板ナデ、押圧痕あり (外面)ハケ	良	7.5YR8/3浅黄橙	
62	A	遺構外	表採	弥生土器	甕	胴部	3%	器高(3.7)	(内面)板ナデ (外面)ハケ	良	2.5YR6/8橙	
63	A	遺構外	IVb層	弥生土器	甕	体部	3%	器高(2.3)	(内面)調整不明 (外面)ハケ	良	7.5YR6/6橙	
64	A	トレンチ	一括	弥生土器	甕	体部	5%	器高(4.6)	(内面)ハケ (外面)ハケ	良	7.5YR6/4にふい橙	
65	A	C4区	IVb層	弥生土器	壺	底部	20%	基部径(4.6) 器高(2.7)	(内外面)調整不明	良	2.5YR6/8橙	

挿図番号	区	グリッド遺構	層位	種別	器種	部位	残存率	法量(cm)	調整技法・施文	焼成	色調	備考
66	A	トレンチ	一括	弥生土器	甕	台部の接合部	15%	器高(4.3)	(内側)ナデ(外面)調整不明(底部内面)輪積み、板ナデ(底部外面)ハケ	良	7.5YR6/2灰褐	
67	A	D4区	IVa層	弥生土器	壺	底部	10%	基部径(6.4)器高(2.4)	(内面)調整不明(外面)ハケ	良	5YR6/4にぶい橙	
68	A	D4区	I a層	須恵器	坏	口縁部	10%	口径(12.2)器高(2.9)	(内外面)ナデ	良	2.5Y7/1灰白	
69	A	D4区	I a層	灰釉陶器	灰釉碗	体部～底部	40%	底径(6.2)器高(2.1)	(内面)ナデ、底部に糸切痕	良	2.5YR8/1灰白	内面に自然釉
95	B	SX01		弥生土器	壺	口縁部	15%	口径(16.4)器高(4.3)	(内面)調整不明(外面)調整不明、口縁部に刻目	良	7.5YR7/2明褐	
96	B	SX01		弥生土器	壺	底部	40%	底径(6.4)器高(2.8)	(内面)調整不明(外面)ハケ、底部に木葉痕・黒斑	良	10YR7/4にぶい黄橙	
97	B	SX01		弥生土器	壺	底部	25%	底径(8.6)器高(3.4)	(内面)調整不明(外面)底部に木葉痕か?	良	7.5YR7/4にぶい橙	
98	B	SD01	最上層(検出面)	弥生土器	壺	口縁部	30%	口径(12.2)器高(2.0)	(内面)ハケ(外面)棒状浮文	良	10YR7/2にぶい黄橙	
99	B	SD01	最下層(検出面)	弥生土器	壺	口縁部～頸部	99%	口径(14.4)器高(8.55)	(内面)ハケのちミガキ(外面)ハケのちミガキか?	良	10YR7/2にぶい黄橙	内外面赤彩
100	B	SD01	上層	弥生土器	壺	頸部	20%	器高(8.5)	(内面)ハケのちナデ(外面)ハケ、横線文、波状文	良	10YR7/4にぶい黄橙	外面赤彩
101	B	SD01		弥生土器	壺	底部	30%	底径(9.3)器高(7.1)	(内面)調整不明(外面)ミガキ	良	7.5YR7/4にぶい橙	スス付着
102	B	SD01	最上層(検出面)	弥生土器	鉢	口縁部	15%	口径(17.6)器高(6.55)	(内面)ナデ、ミガキか?(外)口縁部ハケ調整・刻目、体部ミガキか?	良	7.5YR7/4にぶい橙	
103	B	SD01	上～中層	弥生土器	甕	口縁～肩部	15%	口径(22.8)器高(4.6)	(内面)ハケ、ナデ(外面)ハケ	良	5YR6/4にぶい橙	
104	B	SD01	黒褐色粘土上～中層	弥生土器	甕	口縁～体部	30%	口径(20.8)器高(13.4)	(内面)ハケ、ナデ(外面)ハケ	良	10YR5/2灰黄褐	
105	B	SD01		弥生土器	甕	台部	60%	底径(8.6)器高(8.0)	(体部内面)ハケ、ナデ(体部外面)縦ハケ(台部内面)ナデ、板ナデ(台部外面)ハケ	良	10YR6/3にぶい黄橙	内面スス付着
106	B	SD01	最上層(検出面)	弥生土器	甕	口縁～体部	20%	口径(23.2)器高(9.2)	(内面)ハケ、板ナデ(外面)ハケ	良	10YR6/3にぶい黄橙	スス付着
107	B	SD01	上～中層	弥生土器	甕	口縁～肩部	10%	口径(24.6)器高(5.1)	(内面)ハケ、ナデ(外面)ハケ	良	7.5YR7/4にぶい橙	
108	B	SD01	最上層(検出面)	弥生土器	甕	口縁部	10%	口径(23.6)器高(3.2)	(内面)ハケ、ナデ(外面)ハケ	良	10YR6/2灰黄褐	
109	B	SD01	上～中層	弥生土器	甕	口縁～体部	15%	口径(16.4)器高(4.5)	(内面)ハケ、ナデ(外面)ハケ	良	10YR6/3にぶい黄橙	
110	B	SD01	最下層	弥生土器	甕	口縁部～体部	9%	口径(16.7)器高(4.2)	(内面)ハケ、ナデ(外面)ハケ	良	7.5YR4/1褐灰	スス付着
111	B	SD01	下層	弥生土器	甕	口縁～肩部	15%	口径(21.6)器高(7.1)	(内面)ハケ(外面)ハケ	良	10YR6/2灰黄褐	
112	B	SD01	最下層	弥生土器	甕	台部	55%	底径(11.0)器高(8.5)	(体部内面)ハケ(台部内面)ハケ(台部外面)ハケ	良	10YR5/2灰黄褐	

第2表 出土石製品一覧表

挿図番号	区	グリッド遺構	層位	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	備考
70	A	E4区	III層上面	敲石	灰色細粒砂岩	11.25	6.75	2.7	269.5	
71	A	SZ02W	覆土	磨石	明灰色凝灰質中粒砂岩	9.2	8.3	3.15	350.5	
72	A	SZ03E	覆土	打製刃器	黒色凝灰質粘板岩	7.3	(4.25)	0.95	32.5	
73	A	SZ03S	覆土	敲石	灰色細粒砂岩	(9.9)	5.0	2.5	172.9	
74	A	SZ05墳丘	盛土上面	敲石	灰色珪質凝灰岩	12.0	7.6	3.75	519.7	
75	A	SD02	覆土	石器未製品	黒灰色珪質頁岩	(5.1)	4.35	1.6	37.3	
76	A	SX01	覆土	打製刃器	黒色凝灰質粘板岩	5.45	3.9	0.8	16.8	
77	A	SX02	覆土	打製刃器	黒色凝灰質粘板岩	10.1	(5.05)	1.65	79.1	
78	A	E3区	I層	敲石	暗灰色凝灰質細粒砂岩	9.55	3.15	1.9	79.4	
79	A	E4SE区	V層上面	打製刃器	黒色粘板岩	7.5	5.35	1.05	59.8	
80	A	E4SW区	IVb層下面	磨製刃器	黒色粘板岩	3.2	1.7	0.45	2.5	
113	B	SD01	上～中層	台石	灰色中粒砂岩	15.55	12.25	3.5	886.2	
114	B	SD01	上～中層	不明加工石製品	灰白色珪質凝灰岩	(5.85)	(2.85)	2.00	25.6	穿孔2ヵ所

第3表 出土木製品一覧表

挿図番号	区	グリッド遺構	層位	種別	器種	樹種	木取り	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
81	A	5号畦畔	芯材	農具	田下駄	ヒノキ	楕目	21.8	24.8	2.8	
82	A	5号畦畔	芯材	農具	田下駄	ヒノキ	楕目	22.4	33.3	2.9	
83	A	1号畦畔	芯材	加工材	杭	イヌマキ属	板目	63.6	9.9	7.3	
84	A	1号畦畔	芯材	加工材	杭	スギ	板目	62.9	10.6	7.6	
85	A	2号畦畔	芯材	加工材	杭	ヒノキ	板目	120.2	7.4	5.2	建築材の転用
86	A	4号畦畔	芯材	加工材	横木	スギ	板目	67.8	8.9	3.6	
87	A	4号畦畔	芯材	加工材	杭	スギ	板目	57.5	12.2	5.0	
88	A	4号畦畔	芯材	加工材	杭	スギ	板目	98.4	13.8	6.3	建築材の転用
89	A	6号畦畔	芯材	加工材	用途不明木製品	モミ属	板目	6.4	2.7	1.7	
90	A	SZ01N	覆土	加工材	用途不明木製品	スギ	板目	64.8	2.7	0.6	
91	A	SZ01N	覆土	加工材	用途不明木製品	スギ	板目	52.0	3.5	1.2	
92	A	SZ01E	覆土	加工材	用途不明木製品	スギ	楕目	62.6	4.0	0.7	
93	A	SZ04E	覆土	加工材	用途不明木製品	カヤ	板目	45.2	8.5	3.3	
94	A	SZ04E	覆土	加工材	用途不明木製品	カヤ	板目	35.8	6.4	1.9	
115	B	SD01	中層	容器	割り物	ヤマザクラ	追楕目	(16.85)	(14.9)	5.4	
116	B	SD01	下層	容器	槽?	スギ	楕目	(12.2)	(3.05)	(3.0)	脚部か
117	B	SD01	下層	農具	鍬	アカガシ亜属	楕目	10.2	2.6	1.6	
118	B	包含層	黒褐色粘土中層	農具	鍬	イチイガシ	追楕目	5.6	6.3	1.0	
119	B	SD01	下層	農具	直柄平鍬	イチイガシ	楕目	27.1	11.8	1.5	
120	B	SD01	上層	加工材	用途不明木製品	スギ	板目	47.9	4.9	2.1	
121	B	SD01	上層	加工材	整形版	スギ	楕目	34.6	2.6	1.9	
122	B	SD01	最下層	加工材	用途不明木製品	スギ	板目	22.5	12.8	2.7	

## 第5章 まとめ

### 1 遺構の変遷について

有東遺跡のこれまでの発掘調査結果から、弥生時代中期中葉から集落域の形成がなされ、遺跡の東部を中心とした活動が確認されている。中期後半になると、集落域の東端部が墓域（有東北支群）になり、やや遅れて静岡市立商業高校を中心とした西南部（有東南支群）にも墓域が形成される（静岡市1997b・2011）。今回調査を行ったA区は、隣接する第3・5・6次調査で検出された方形周溝墓群によって把握される有東南支群に含まれる位置にある。A区を含む有東南支群の方形周溝墓は上部の攪乱が顕著であり、出土遺物に恵まれないため時期的な押さえをすることが困難であるが、弥生中期中葉に遡る可能性はあるものの、おおむね弥生中期後半の遺構と考えられている（静岡市2011）。今回検出されたS Z 01～S Z 05も出土遺物が極めて少なく、また後世の混入品もみられることから、遺物から遺構の築造時期を知ることは難しい。ただ、S Z 04やS Z 05出土の壺、甕には弥生中期後半のやや古い段階の特徴を持つものも含まれ、また後述するように有東南支群の方形周溝墓と同様の様相を持つことから、弥生時代中期後半期の古い段階を中心とした時期に築造された方形周溝墓群と考えられる。

A区下層で検出された5基の方形周溝墓群は第3・5・6次調査で検出された方形周溝墓と形態及び配置に類似性がみられる。具体的には、四隅が切れた直線的な周溝で囲まれる形状を示すこと、また同じ主軸方向をもって群をなしていることや、隣接する方形周溝墓の周溝が共有しないものが多いことなどが挙げられる。よって、隣接する第3・5・6次調査区方形周溝墓と一連の遺構である可能性は極めて高く、今回の調査で検出された方形周溝墓が有東南支群と位置づけられた方向周溝墓群の一角を占めることが明らかとなった。また、弥生中期中葉の土器を伴う溝状遺構S D 03などの存在から、様相は明らかではないものの、方形周溝墓S Z 01～S Z 05に先行する人々の活動があったことが窺える。

弥生時代後期になると居住域は分散傾向となり、それまで居住域や墓域であったA区を含む地域は水田域となることが想定されている（伊藤1991・静岡市1997b）。A区でもⅢ層土を耕作土とする弥生時代後期～古墳時代前期の畦畔、3号畦畔・5号畦畔が検出されており、同様の土地利用がなされていたことが窺える。こうした水田域の拡大は有東遺跡周辺地域における低湿地化が進行したことによると指摘されるが（静岡県1983b）、盛土が削平されずに高まりとして残存していた方形周溝墓S Z 05は、水田畦畔の一部などで利用されていた可能性もある。A区周辺では古墳時代後期とみられる1号畦畔・2号畦畔・4号畦畔の存在から、それ以降も水田域としての土地利用がなされ続けたものと考えられる。

一方、B区を含む有東遺跡南西地区では居住域が営まれるようになり、第5次調査では当該期の平地式の住居が検出されている（静岡市2011）。今回B区で検出された溝状遺構S D 01は弥生時代後期中葉に位置づけられ、第5次調査検出住居と重なる時期の遺構と考えられる。調査区が狭小であるため、S D 01の性格を窺うのは困難ではあるが、出土遺物の様相から集落域に伴う溝状遺構と考えられるため、少なくとも第5次調査地点から第22次調査地点B区にまで、当該期の集落域が広がっていたことが想定される。

今回の第22次発掘調査では、これまで行われてきた有東遺跡発掘調査成果で得られた知見をさらに補強する資料が得られた。弥生時代中期～後期にわたる有東遺跡の集落構造の解明に貴重な資料を追加したといえ、今後のさらなる研究の深化が期待される。

## 2 出土木製品について

今回有東遺跡で出土した木製品の概要について簡単にまとめる。A区出土の木製品は水田域や方形周溝墓の周溝内から出土した。水田の畦畔構築に使われた杭や横板は建築材を再利用したものである。静清平野はスギ材が多用される地域だが、イヌマキやヒノキ、カヤ材などが見られる。

B区出土の木製品は弥生時代後期の集落域に近い場所の溝跡から出土したもので、農耕具、容器など集落又は水田域などの生活域で使われるものが多い。農耕具は曲柄鍬や直柄鍬が出土している。弥生時代中期後半に稲作と共に静清平野に伝わってきた農耕具は東駿河にまで及び、弥生時代後期に入ると農耕具は各地の土質等に対応するように形状が変化してくる傾向がある（中川 2008）。鍬身に使われる樹種はほぼ100%カシ材と言ってよい。鍬柄は静岡県内ではカシまたはサカキ材が主体で、スギ材等は使わない。容器については、小判形の削り物は県内あるいは静清平野でも弥生時代後期に数多く出土している。静清平野周辺域で出土する小型の削り物はスギなどの針葉樹で作られることが多いが、広葉樹材も稀にある。一方、登呂遺跡や寺家前遺跡などの弥生時代後期の集落遺跡で出土する大型の槽はスギ材で作られる。今回の樹種同定の結果は半数がスギ材、針葉樹材は8割であった。この傾向は静清平野で出土する弥生時代後期～古墳時代にかけての木製品のほぼ9割がスギ等の針葉樹材であることとほぼ合致する。

## 参考文献

- 伊藤寿夫 1991 「静岡市有東遺跡における弥生時代集落の検討」『静岡市立登呂博物館館報2—平成3年度—』静岡市立登呂博物館
- 上原真人編 1993 『木器集成図録（近畿原始篇）』奈良国立文化財研究所
- 樋上 昇 1993 「木製農耕具研究の一視点—ナスビ形農耕具の出現から消滅まで—」『考古学フォーラム3』考古学フォーラム
- 樋上 昇 1994 「耕作のための道具—ナスビ形農耕具を中心に—」『季刊考古学』第47号 雄山閣
- 山田昌久 2003 『考古資料大観8 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館
- 中川律子 2008 「東海（特集 弥生・古墳時代の木製農具）」『季刊考古学』第104号 雄山閣
- 黒坂貴裕ほか 2010 『出土建築部材における調査方法についての研究報告』（化学研究費補助金 基盤研究（A） 課題番号：18202026 「遺跡出土の建築部材に関する総合的研究」（平成18年度～21年度））奈良文化財研究所
- 静岡県教育委員会 1983a 『有東遺跡 静岡南警察署建設用地埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
- 静岡県教育委員会 1983b 『有東遺跡 静岡南警察署建設用地埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ下』
- 静岡市教育委員会 1990 『静岡市の埋蔵文化財発掘調査の概要 平成元年度』
- 静岡市教育委員会 1997a 『有東遺跡第14次発掘調査報告書』
- 静岡市教育委員会 1997b 『有東遺跡第16次発掘調査報告書』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002 『有東遺跡—第20次発掘調査—』
- 静岡市教育委員会 2011 『有東遺跡第5次発掘調査報告書』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2011 『有東遺跡（第17次発掘調査）』



# 写 真 图 版





1. A区上層全景（北西から）



2. A区上層全景（東から）

図版 2



1. 1号畦畔検出状況（北から）



2. 2号畦畔芯材出土状況（東から）



1. 1号・2号畦畔検出状況（北から）



2. 4号畦畔検出状況（北から）

図版 4



1. 5号畦畔検出状況（北東から）



2. 5号畦畔内遺物出土状況（北西から）



1. A区下層全景（西から）



2. A区下層全景（南西から）

図版 6



1. S Z01完掘状況（東から）



2. S Z01E遺物出土状況（東から）



1. S Z02完掘状況（北西から）



2. S Z03完掘状況（北西から）

図版 8



1. SZ04完掘状況（南東から）



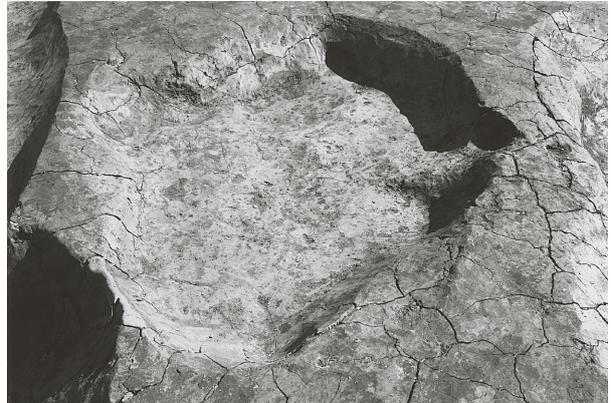
2. SZ03・04遠景（南西から）



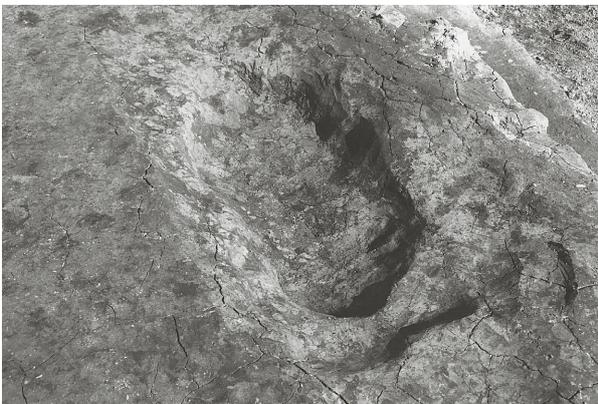
1. S Z05完掘状況（北西から）



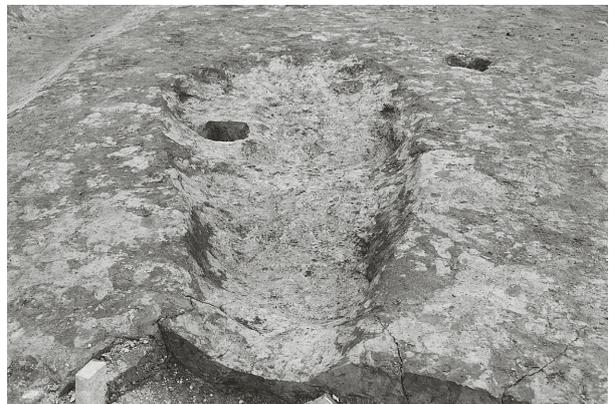
2. S K02完掘状況（北西から）



3. S K03完掘状況（北西から）



4. S K06完掘状況（西から）



5. S K10完掘状況（北西から）

図版 10



1. SK19遺物出土状況（西から）



2. SK23遺物出土状況（北から）



3. SX02・SZ05完掘状況（西から）



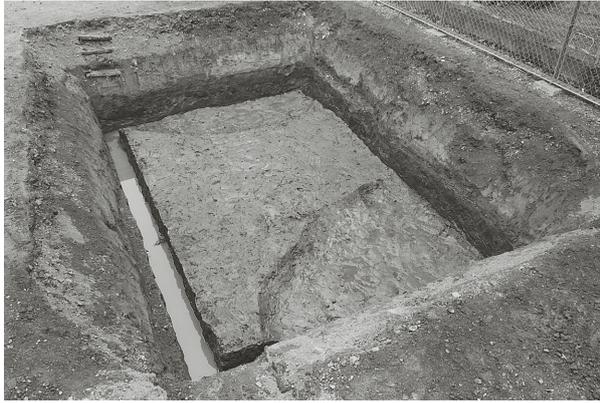
4. SX03・04完掘状況（西から）



5. SD01完掘状況（北西から）



6. SD03完掘状況（南東から）



1. B区上層完掘状況（北から）



2. B区SD01木製品出土状況（南東から）



3. SD01完掘状況（南から）

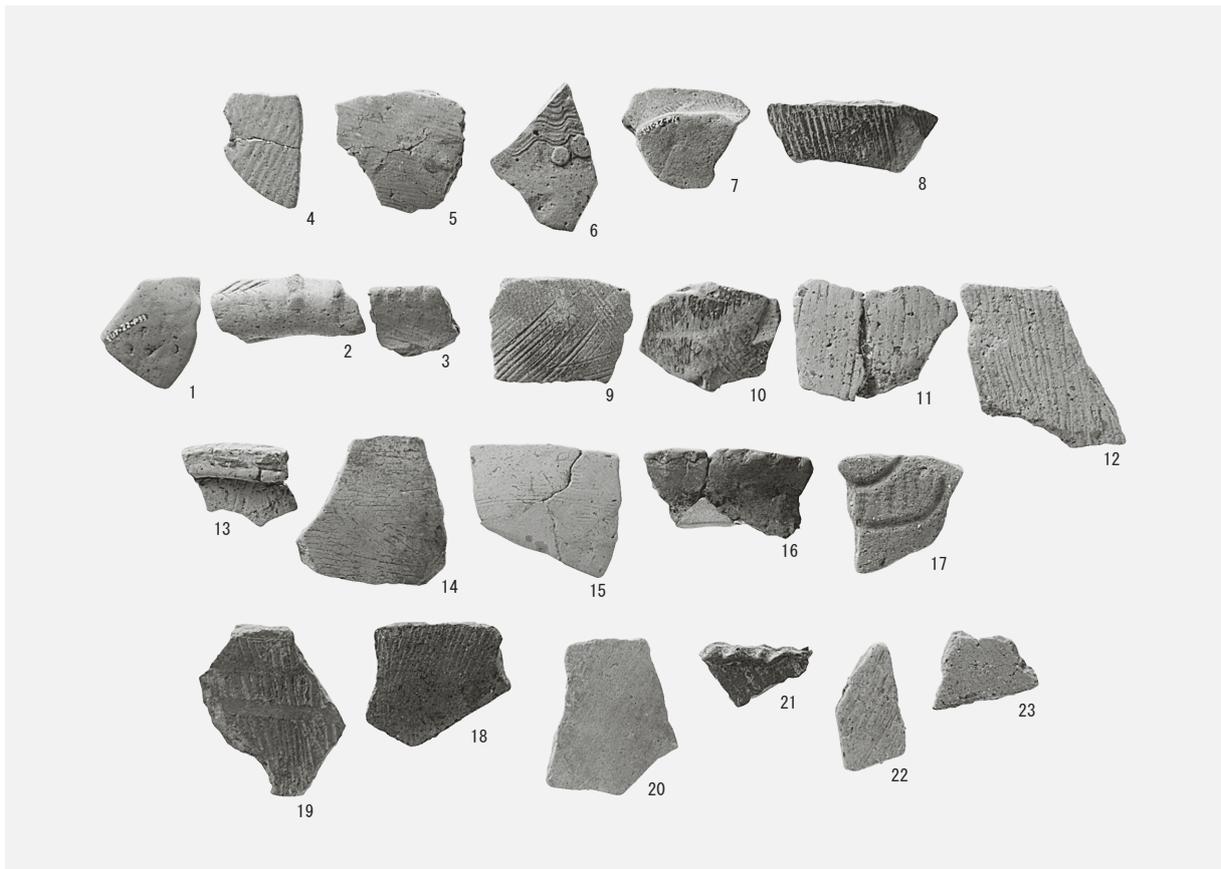


4. B区西壁土層（東から）

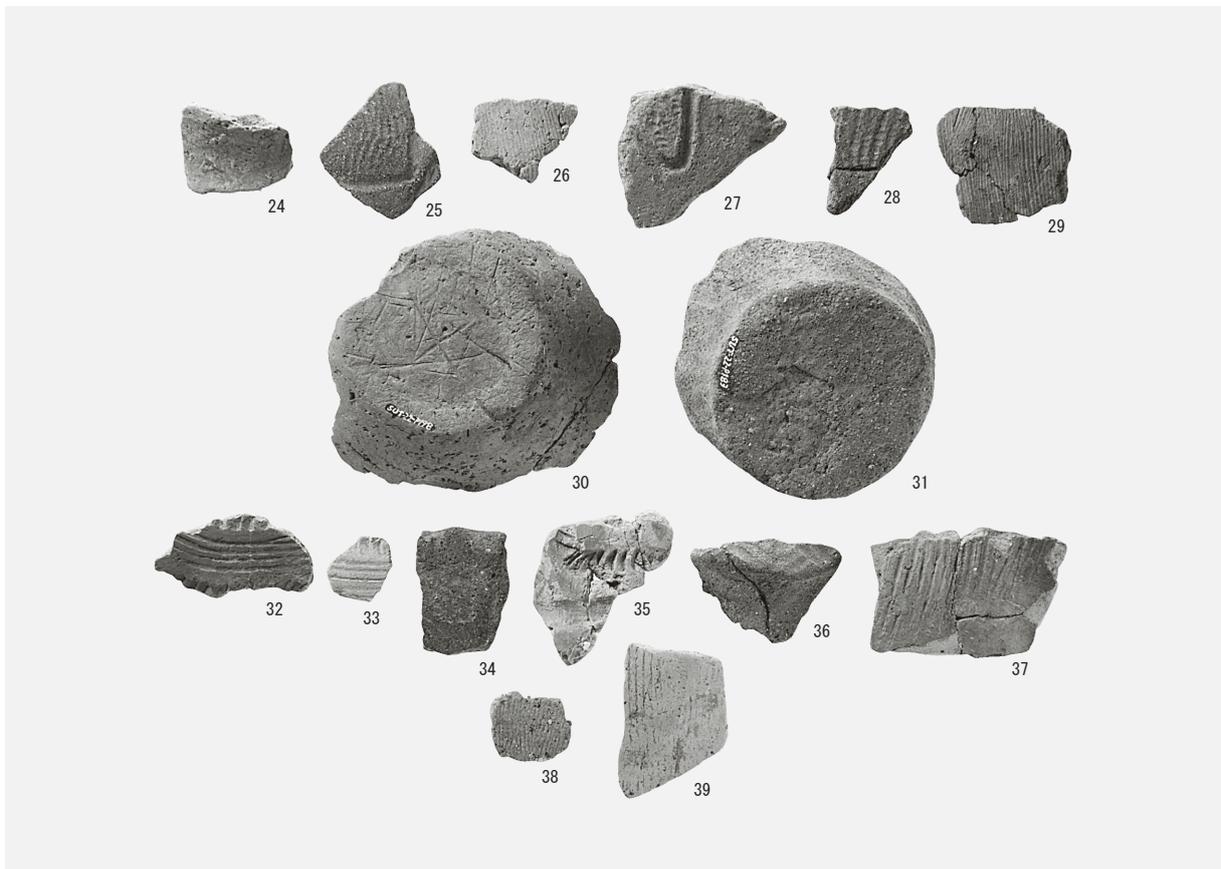


5. B区下層全景（南東から）

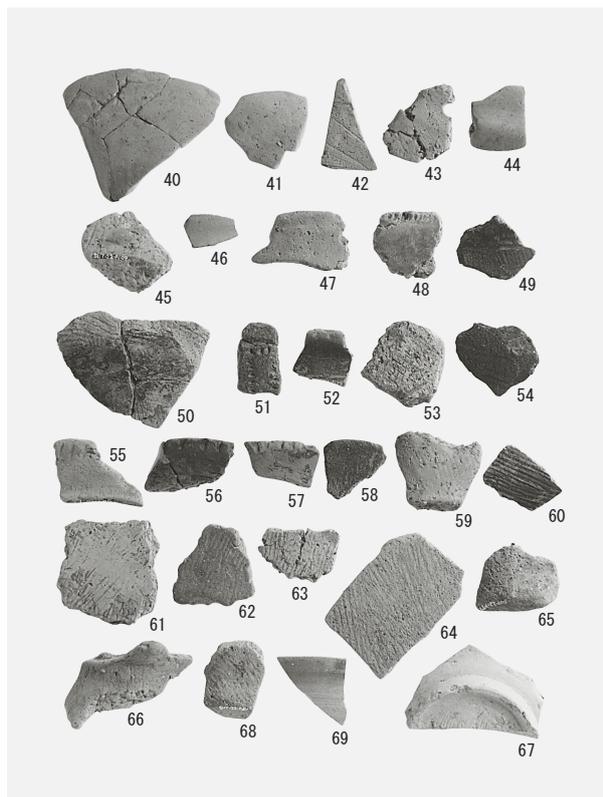
图版 12



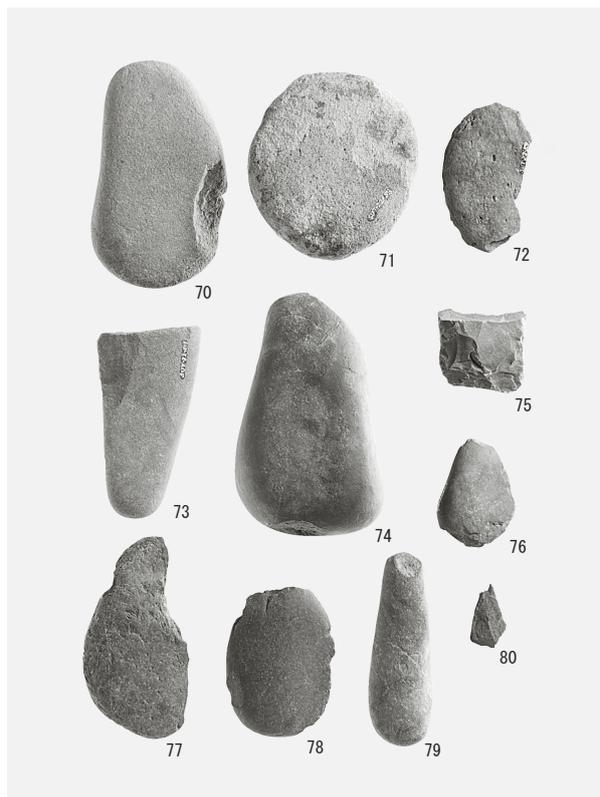
1. A区遺構出土土器



2. A区遺構出土土器



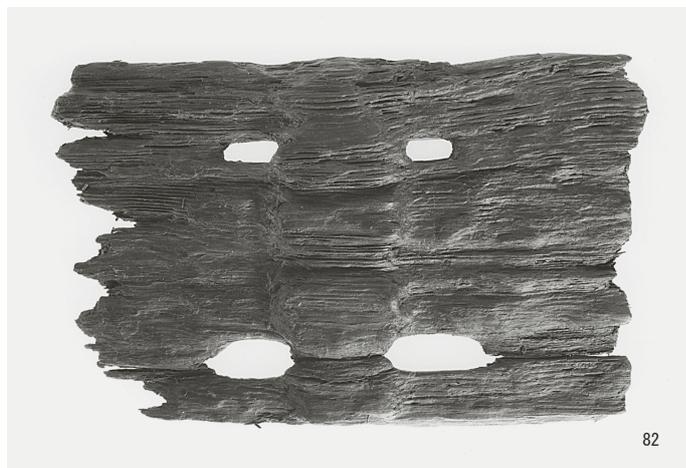
1. A区遺構外出土土器



2. A区出土石製品



81



82



83



84

3. A区出土木製品



1. A区出土木製品



1. B区SD01出土土器



2. B区SX01·02出土土器



3. B区出土石製品

图版 16



1. B区S D01出土木製品

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	うとういせき							
書名	有東遺跡							
副書名	第22次発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	溝口彰啓 中川律子							
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20 電話 054 (262) 4261(代)							
発行年月日	平成24年 3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
うとういせき 有東遺跡	しずおかけんしずおかし 静岡県静岡市 するがくうとう 駿河区有東	221015	B76	34° 57' 49"	138° 24' 37"	201007 ～ 201012  201111 ～ 201112	A区 941m <sup>2</sup> B区 31m <sup>2</sup>	開発等の 事業に伴 うもの (学校施 設建設)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
有東遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	方形周溝墓 5基 土坑 24基 溝 4条 性格不明遺構 4基 水田畦畔 5条		弥生土器 土師器 木製品 石製品			
要約	<p>今回の発掘調査は有東遺跡第22次調査にあたり、静岡市立商業高等学校敷地内で行われた。調査はA区、B区の2ヶ所で実施している。</p> <p>北側のA区では弥生時代中期後半の方形周溝墓5基が検出され、その後弥生時代後期以降は水田域となることが判明した。一方、南側のB区では弥生時代後期中葉の集落域に伴う溝状遺構が検出され、当該期の集落域の現時点における南端が把握された。</p>							

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第18集

## 有 東 遺 跡

—第22次発掘調査—

平成22年度静岡地区新構想高等学校（仮称）建設事業  
平成24年度新構想高等学校（仮称）屋外便所建築工事  
に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成24年3月26日 発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター  
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20  
TEL 054-262-4261(代)  
FAX 054-262-4266  
印刷所 みどり美術印刷株式会社  
〒410-0058 沼津市沼北町2丁目16番19号  
TEL 055-921-1839(代)